

国立国会図書館



館長対談 第12回

児童文学者 松岡享子氏

読書は本とのコミュニケーション

世界図書館情報会議—第75回国際図書館連盟 (IFLA) 大会
図書館が未来を創る 文化遺産を礎に

2009.12

No. 585

国立国会図書館利用案内

東京本館

所在地 〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号 03(3581)2331
利用案内 03(3506)3300(音声サービス)
03(3506)3301(FAXサービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間	月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00	即日複写受付	月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00
	<small>※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は17:00までです。</small>	後日複写受付	月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30
資料請求時間	月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00	オンライン複写受付	月～金曜日 10:00～17:30 土曜日 10:00～15:30
	<small>※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室および古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。</small>		

■見学のお申込み／国立国会図書館 資料提供部 利用者サービス企画課 03(3581)2331 内線26111

関西館

所在地 〒619-0287 京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号 0774(98)1200(音声サービス)
利用案内 0774(98)1212(FAXサービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間	月～土曜日 10:00～18:00	即日複写受付	月～土曜日 10:00～17:00
資料請求時間	月～土曜日 10:00～17:15	後日複写受付	月～土曜日 10:00～17:45
セルフ複写受付	月～土曜日 10:00～17:30	オンライン複写受付	月～土曜日 10:00～17:00

■見学のお申込み／国立国会図書館関西館 総務課 0774(98)1224 [直通]

国際子ども図書館

所在地 〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電話番号 03(3827)2053
利用案内 03(3827)2069(音声・FAXサービス)
ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>
利用できる人 どなたでも利用できます(ただし第一・第二資料室は満18歳以上の方)。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。
おもな資料 国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間	火～日曜日 9:30～17:00	<small>※1階子どものへや、世界を知るへやおよび3階メディアふれあいコーナー、本のミュージアムの利用時間は、開館時間と同じく9:30～17:00です。</small>	
第一・第二資料室の利用時間	閲覧時間	火～土曜日 9:30～17:00	資料請求時間 火～土曜日 9:30～16:30
複写サービス時間	即日複写受付	火～日曜日 10:00～16:00	後日複写受付 火～日曜日 10:00～16:30
	複写製品引渡し	火～日曜日 10:30～12:00 13:00～16:30	

■見学のお申込み／国立国会図書館国際子ども図書館 03(3827)2053 [代表]

02 和蘭軍装図

今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から

04 国立国会図書館 館長対談 第12回

児童文学者 松岡 享子 氏

読書は本とのコミュニケーション

14 図書館が未来を創る 文化遺産を礎に

世界図書館情報会議－第75回国際図書館連盟 (IFLA) 大会

16 国際的な協力関係の構築 政府機関図書館分科会と国際協力担当者会合

17 民主主義のためのデジタル情報 議会のための図書館・調査サービス分科会

19 次々と刊行される書誌情報の基準・ガイドライン 書誌分科会、目録分科会

20 多角的にとらえる資料保存 資料保存コア活動、IFLA 資料保存分科会関連会議

22 「読書人の国を造る」 児童・ヤングアダルト図書館分科会

24 国立国会図書館の書庫 第7回(最終回) 資料にあわせた書架の利用

23 館内スコープ

人と人とのつながりから生まれるもの

26 本屋にない本

- 『公立図書館・文書館・博物館 協同と協力の動向』
- 『板橋と光学 国産フィルム発祥の地 光学王国 企画展』

28 NDL NEWS

- 国民読書年プレ・イベント
- 納本制度審議会オンライン資料の収集に関する小委員会 (第1回)
- 平成21年度児童サービス連絡会

30 お知らせ

- 電子展示会「江戸時代の日蘭交流」が始まりました
- 資料の大規模デジタル化に伴う原資料の利用停止について
- 関西館小展示第4回「冬季オリンピック」
- 印画紙への引伸印画サービスの終了
- 新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物

34 『国立国会図書館月報』年間索引

おらんだ
和蘭軍装図

白岩 一彦



写真1 『和蘭軍装図』第19図

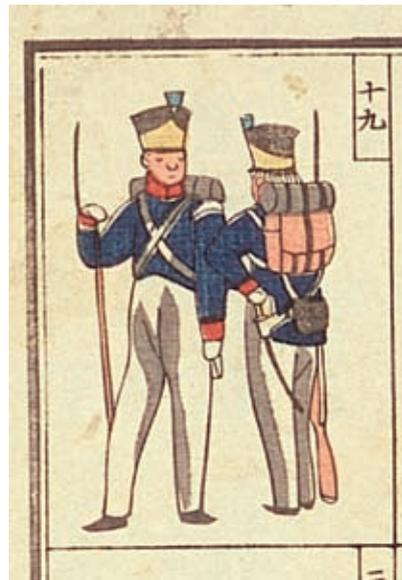


写真2 『和蘭官軍之服色及軍装略図』第19図

幕末の日本では、オランダ語の軍事関係図書が江戸をはじめとする日本各地に出島経由で運ばれ、それらの図書を参考にして諸藩は砲台を築き、幕府は砲台の構築に加えて陸軍および海軍の創設に取り組んだ。こうした取組みの中で、陸軍軍人の服装についても、それまで武士が用いていた鎖帷子や甲冑といったものを止めて、オランダ式の軍服や兵装を導入することが検討され、実行に移された。

ここで取り上げる『和蘭軍装図』（写真1 オランダ語の書名は文末）は、幕府のそうした兵制改革の参考とするためにオランダから輸入されたもので、オランダ王国軍人の各階級の軍服、装備、徽章についての本文編と図版編からなる。

本書の本文編はきわめて詳細であり、また1814年以降の軍装史年表も付いているが、幕末の日本で注目を集めたのは図版編の方であった。この図版編をもとに模写本や絵巻物が作られ、また、山脇正民の訳による和訳本が、『和蘭官軍之服色及軍装略図』〈請求記号 W442-30〉という題で

江戸赤坂の講武塾から安政5(1858)年に出版された(写真2)。

和訳本の刊行にあたっては、図版全51図のうち徽章の図を除く48図が、村上文成により原書の順番どおりに再現された。ただし和訳本では、大幅に画像が縮小・簡略化され、一丁の表裏にそれぞれ9図が入られている。惜しいことに当館所蔵本には落丁が一丁分あり、第22図から第39図までの18図が抜けている。

『和蘭軍装図』は、武雄市歴史資料館でも所蔵しており、また、図版編の模写本が津山洋学資料館やライデン大学などにある。本書には1826年に刊行された補巻の存在も知られているが、当館では所蔵していない。

『和蘭軍装図』に収録された歩兵の図に見られる革製の背囊（オランダ語でRansel）は明治期の日本陸軍で採用されたが、この軍人用の背囊から生まれたのが小学生のランドセルである。

明治初期には、まだ通学用のランドセルというものはな



写真3 横尾謙七著『和言孝経』宝積堂 1873 明治時代の小学校の道徳の教科書。〈請求記号 YDM8833〉

く、子どもたちは風呂敷包みに石盤を入れるか、または石盤をそのまま持って学校に通っていた(写真3)。

その後、日本では初の試みとして、明治18年に学習院の初等学科で通学にランドセルを使うことになった(写真4)。そのことは、『学習院百年史 第1編』(学習院刊1981年)〈請求記号 FB22-1471〉に掲載されている、次のような当時の学内掲示からうかがえる。

「生徒携帯之書物入、行々欧洲尚武国之風ニ倣ヒ歩兵用ランドセルノ形ニ一定致度候間、新ニ調整ノ者ハ成ルヘク本院歩兵科用ランドセルニ改造可致候事

但シ製造望ノ者ハ本院へ申出候ハ、調整可申付候 代価凡ソ二円六拾銭位」(前掲書 p.289)

その後ランドセルの利用は徐々に日本各地の学校に広まっていき、昭和30年代までに全国の学校に普及した。

こうして、『和蘭軍装図』に見られる軍装をもとに幕末明治の日本に導入された軍人の背囊は、その後、小学生の

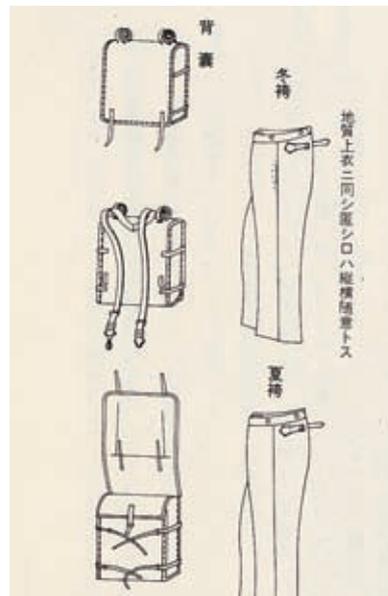


写真4 学習院において明治23(1890)年8月に制定された、学生心得第十章 服制及被服調製手続 付図(部分) (『学習院百年史 第1編』 p.287)

通学用具としてのランドセルに姿を変え、広く日本人に愛されて今日に至っている。(しらいわ かずひこ)

Teupken, J.F. *Beschrijving hoedanig de koninklijke Nederlandsche troepen en alle in militaire betrekking staande personen gekleed, geëquipeerd en gewapend zijn...gevolgd van 51 platen met eene titelplaat, voorstellende officieren en manschappen van alle wapenen, in hunne volle kleeding en wapenrusting.* 's Gravenhage, Gebroeders Van Cleef, 1823. 10,110,20p.51 pl. 〈請求記号 蘭-832〉 兵部省旧蔵、陸軍文庫本。

* 上記書名の日本語訳は下記のとおり。

『オランダ王国軍隊および地位のあるすべての軍人が軍服、装備、武器を着用した状態についての記述... 軍服と武器を完璧に身につけた想定上の士官たちと完全装備の兵士の図版51枚および標題紙』

参考文献

- 片桐一男『『和蘭官軍之服飾及軍装略図』の原書とその附図の模写図をめぐって』『古美術』(66) pp.62-78 1983.4
- 武雄市図書館・歴史資料館編『蘭学の来た道 武雄領主の買いの帳』武雄市図書館・歴史資料館 2004

※この資料を収録したインターネット上の電子展示会「江戸時代の日蘭交流」が、12月16日から始まりました(詳しくは、本誌 p.30「お知らせ」参照)。

※写真3の資料は、「近代デジタルライブラリー」(<http://kindai.ndl.go.jp/>)をご覧ください。

第 12 回 読書は本とのコミュニケーション

「本というのは、自分とは別の人の
ようなものですから、その人と
出会わなくちゃならないんですよ。」

今月号のお客様 児童文学者 松岡 享子 氏



児童文学の創作、翻訳で活躍され、東京子ども図書館の理事長として児童図書館の活動にも熱意をもって取り組んでおられる松岡享子氏に、子どもと読書について、また国際子ども図書館の役割についてお話を伺いました。

松岡

子どもたちへの本当のサービスは、身近な地域図書館で行われるのが一番いいと思っています

長尾 きょうは松岡享子先生に国際子ども図書館においていただきました。国際子ども図書館の設立にもご支援いただいたと聞いており、本当にありがとうございます。先生が石井桃子先生のあと、子どもの本、児童書について常にいろいろリーダーシップをとってやっていらっしゃるのを本当に尊敬しております。

国立図書館という児童書は二の次三の次に扱っているのだらうと思われているようですが、日本では、みなさんのご支援ご努力によって、国際子ども図書館が立派にできあがったことを大変うれしく思っております。先生としてはどんな感想をお持ちですか。

松岡 国立の子どもの図書館があるということは、国が子どもの読書に関心をもっていることの一つの表れとしてシンボリックな価値があると思います。子どもにとっては、近所に使いこなせる図書館があるということが一番大事だと思うのですが、そういう図書館を地方自治体が運営する後ろ盾として、国が施策として子どもの本や教育のことを大事にしているんだ、という姿勢を表す意味はとても大きい。よその国に行きますと、国立の子どもの本の図書館があるという、うらやましがられます。

長尾 そう、うらやましがられていますよね。

松岡 お隣の韓国にも国立の子どもの図書館ができましたね¹。それは、国が子どもの本や子どもの読書に関心をもって、国全体としていい方向にいくように目を向けているんだよ、と内外に示す意味があります。

長尾 私どもの国際子ども図書館には二つ柱があると思っています。子どもたちに読書の楽しさを与えるという柱と、もう一つは児童書に関する研究ですね、そういう専門家、研

究者のための図書館でもある、という両輪でがんばっているつもりです。特に子どもたちに対するサービスは、読み聞かせの会などできるだけ満足していただけるように努力をしているつもりなんです。

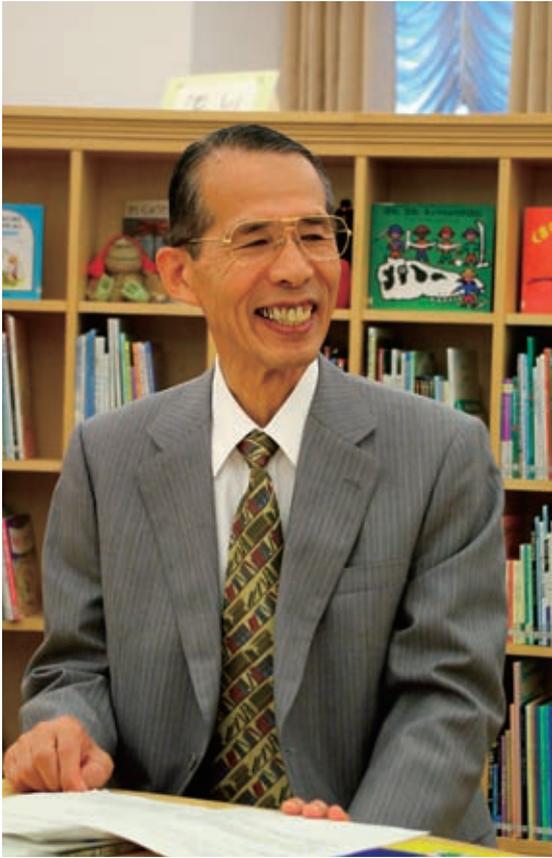
松岡 ええ、ここでの活動は私もよく存じ上げております。ただ私の立場から申し上げますと、私は、実際に子どもたちにサービスをすることは、国立図書館の第一義的役割とは考えておりません。子どもたちへの本当のサービスは、身近な地域図書館で行われるのが一番いいと思っています。国立にはもっと別の役割がある、と。

その一つは子どもの本に関する資料を収集、保存するということです。それは研究というところにつながっていくと思いますが、この英語名は“International Library of Children's Literature”となっていますね。この名前がついたのは、どちらかという、“literature”（資料）の収集・整理に重きをおいているという印象を受けています。国のレベルで、子どもの本や読書に関する資料を丁寧に集めて保存し、それを利用できるような状態に整理して提供する。それは、とても大事な、ほかではなかなかできないことで、それこそ国立ならではの役割だと思うのです。国立がこの役割を果たしてくださるのは、私たち子どもの本の関係者にとっては、たいへんありがたいことだと思っています。

それから、もう一つ。元来図書館には、資料の収集・保存と、それを活用したサービスの二つの機能がありますが、そのサービスの面では、国立には、直接子どもにサービスをする地域の小さな図書館がいい活動ができるための後ろ盾になっていただきたいと思うのです。人材育成、読書環境の整備、あるいは外国のサービスの実態を日本に知らせる、逆に日本の状況を海外に発信する。個々の関係

¹ 国立中央図書館の一組織として、韓国国立子ども青少年図書館が2006年6月に開館した。

長尾
読書の習慣というのは子どももの時代に身につけなければならぬ
ということを非常に強調しておられますね



Makoto Nagao

1936年生まれ 工学博士
専門は、自然言語処理、画像処理、パターン認識、電子図書館。
京都大学工学部電子工学卒業、京都大学総長(第23代)、独立行政法人情報通信研究機構理事長を経て、2007年4月から国立国会図書館長。

私の問題意識

児童書の図書館を国立で持つということの大切さは認識していたが、これをどのように位置づけ、発展させてゆくのが良いかについては、確たる考えを持っているわけではなかった。その道のベテランで当館の国際子ども図書館の設立以来ずっと温かく見守ってきていただいた松岡さんと対談して、お考えを聞きたいとかねがね考えていた。

皇后陛下もお会いするたびに国際子ども図書館をよろしくと期待をこめておっしゃってくださっているので、松岡さんからいろいろとヒントをもらいたいと思った。

者ができない国際交流活動を行う、など。

長尾 なるほど。

松岡 国であるからには、市町村レベルの図書館ではできないことをしていただきたいのです。消失しがちな資料を確実に保存して利用できるようにしてくださること、子どもと本を直接つなぐサービスを実際に担当している人を助ける仕事をしてくださること。それが、国立に期待するところです。ただ、児童図書館員を助ける仕事は、ここに児童サービスの経験のある職員の人がいてくださらないと、なかなか難しいと思いますので、まずは資料の収集・保存をしっかりとやっていただければありがたいと思います。

長尾 公共図書館員に対する研修はしておりますね。また、都道府県立図書館や東京子ども図書館との人材交流があります。

松岡 人材交流はとても大事なことだと思いますね。ここの職員と、県立や、市町村立で実際に児童サービスを担当している人とが一定期間互いの職場で働く経験をもつと、それぞれの役割がもっとよくわかってくると思います。

またここは研究機関でもあるわけで、この資料をもとにした展示や講習会などもしていただしていますが、実際に子どもと仕事をしている人に対する支援ということになりますと、その人たちが求めているものは、研究や学問というよりは、もっと実践的な訓練です。児童図書館員の養成ということに関しては、国立国会図書館だけでなく、大学や図書館協会など、他の図書館員養成機関とも連携して、どういうプログラムを設けたらいいか、これからよく考えなければいけないことだろう、と思います。

長尾 国立国会図書館全体でも、公共図書館の館員の方への研修というものは非常に力を

入れています、去年は、館内で開催する研修のほかに、各地に130名以上の講師を派遣しています。

松岡 それを児童サービスの分野にも広げていただけるといいと思います。現状では、図書館員が一つの部署に定着して仕事をするということがなかなかできないので、経験や知識の積み重ねをもった児童図書館員が各地にいるという状況にないのが実情です。そのあたりが一番難しいことだ、と思っています。

長尾 国として来年2010年を国民読書年としてがんばろうということになっているわけですが、私どももいろんな企画をしたいと思っています。図書館では、いろんな方が読書になじんでくださるようにしていきたいのですが、松岡先生のご本を読んでいますと、読書の習慣というのは子どもの時代に身につけなければならないということを非常に強調しておられますね。

松岡 そうですよ。(笑)以前は、「良い本」—この定義は難しいと思いますが—「良い本」に子どもが会いさえすればもうそれでいい、と思っていました。ですから、とにかく子どもに本を読んでやってほしいということを一所懸命にお話してきたんですが、1970年～80年のあたりで日本の社会に大きな変化が起き、子どもたちにも変化が出てきたのです。私のように非常に狭い範囲で子どもを見てさえ、子どもたちの変化が目立つようになりました。前に喜ばれた本を薦めてもあまり喜ばなかったり、前は続きが出ると競い合っ読んでいたような本でも「ああそう」というくらいの熱意のなさで受け取ったりする子どもが出てきたのです。そのことから、私は、子どもに良い本を手渡せばそれでいい、とは考えられなくなったのです。良い本と出会っ



Kyoko Matsuoka

1935年生まれ
神戸女学院大学英文科、慶應義塾大学図書館学科卒業。1960年渡米。ウェスタンミシガン大学大学院で児童図書館学を学び、ボルチモア市立公共図書館に勤務。1963年帰国。大阪市立中央図書館に勤務。1966年退職後は児童文学の創作、翻訳、研究に従事。1974年石井桃子氏などとともに財団法人東京子ども図書館を設立。同館理事長。1992年度、1994年度国際アンデルセン賞選考委員などを歴任。おもな作品に『みしのたくかにと』『くまのパディントン』『ゆかいなヘンリーくん』など多数。

松岡
直接子どもにサービスをする地域の小さな図書館が
いい活動ができるための
後ろ盾になっていただきたい

長尾
本と自分とがコミュニケーションをやる、単に目で読んでいるだけではないか
いうところが重要なんじゃないか

たときに子どもの中に何かが起こるためには、子どもも、読者として良い育ち方をしていないといけないのではないかと考えるようになったのです。このように1970～80年代以降、私の気持ちの中で大きなシフトがありまして、「本」のほうから「子ども」のほうに仕事の重心が移ったような気がしています。

長尾 なるほど。

松岡 生まれたとき、まだ、言葉も言わないうちから、お母さんが子どもにどういふふうに相對していったらいいとか。小さい子どもたちは、あまり早くから人工的なもの—パソコンやゲームなど—にばかり走るのではなく、自然に触れる機会がないといけないとか、もっとうんと遊ばなくちゃいけないとか。そういうことをしてきた子どもが、お話もよく聞けるし、本を読んでも楽しめる子どもになるのだとわかってきたのです。以前、国際児童図書評議会の会長をしていらした方が、読書というのは橋をかけるようなもので、本のほうから半分橋がかかっても、読む人のほうからも橋をかけて、両方が出会わないと読書にならないということをおっしゃったことがあって、ああ、おもしろいとえだと思ったことがありました。

長尾 最近お出しになった『ことばの贈りもの』（東京子ども図書館刊 2009年）などを拝見すると、母親と赤ちゃんとのことなども、ずいぶん観察なさって、研究もなさって。

松岡 いいえ、研究なんてしていません。もっぱら研究なさっている方の受け売りです。（笑）

長尾 結局、コミュニケーションがほんとの意味でうまくできるというのが一番のポイントなんじゃないかな。

松岡 はい。そうです。

長尾 すると、本を読むときに、本と自分と

がコミュニケーションをやる、単に目で読んでいるだけではないというところが重要なんじゃないかと。

松岡 本当にそのとおりです。本というのは、自分とは別の人のようなものですから、その人と出会わなくちゃならないんですよね。そのためには、現実の生活の中で、自分の身の周りにいる人とちゃんと出会って、その人との間に気持ちを通うという体験をもっていないと、本とのコミュニケーションも成り立たないんだと思います。お母さんやお父さんが子どもをかわいがって育てて、子どもがお母さんやお父さんに自分の思っていることがよくわかってもらえる、という体験をたくさんして、安心して大きくなる。そうすれば、ほかの人の言葉も、本の言葉もよく聞けて、受け止められるようになる。そういう子どもたちが良い読者になるんだろうな、そうやってほしいな、と思っています。

長尾 言葉のもつ力というのは、お母さんの場合も赤ちゃんに対して働いているし、赤ちゃんの言葉を母親や大人が理解できるようにする必要はあるということなんじゃないかな。

あの本の中で、言葉の問題を分析的に観察しておられるのを読ませていただき、非常に感心しました。私は工学部で言葉を機械で翻訳する研究をしましたので、非常に共感することが多くて。

松岡 そうですか。それはうれしいことがありました。

長尾 あの本にハリデイ²にお会いになった話が出てきますね。ハリデイは私の友達みたいな人でして、今オーストラリアにいますね。

² Michael Alexander Kirkwood Halliday (1925-) 英国の言語学者。おもな著作に『機能文法のすすめ』（大修館書店刊）、「テキストはどのように構成されるか」（ひつじ書房刊）など。

松岡

自分の身の周りにいる人とちゃんと出会って、その人との間に気持ちが通うという体験をもっていないと、本とのコミュニケーションも成り立たないんだと思います

あの人がそういう幼児の観察をして、幼児と母親のコミュニケーションに関してそこまで考えているのは全然知りませんでした。

松岡 そうですか。ずっと昔、英国文化振興会のレクチャーでお話を聞きました。一般の人のための会で、学会ではなかったの、ご自分のお子さんの話などをしようと思いいになったのかもしれない。

長尾 あそこまで考えているのか、と非常に興味深く拝見しました。独特の言語理論を構築している人です。

松岡 私もハリデイ先生のご本を何冊か買ったのですが、すごく難しくて。(笑)

長尾 独特ですが、面白いですよ。

松岡 あのとときのハリデイ先生のお話は本当に面白かったのです。「子どもの言うことを聞かなくちゃいけない」というのも私には非常に納得がいったし。当時の保育園の先生方は子どもに言葉をかけることばかり心がけていらしたのですが、コミュニケーションですから、こっちから言葉をかけるだけではなく、向こうの言うことを受け止めるという関係ができていないといけないのですよね。そういう関係を子どもと作るためには、子どもの言うことを聞く大人がいることがやはりとても大事だ、と思いました。

長尾 先生は、ご自身でも児童文学の創作、翻訳などもたくさんしておられますが、言葉を選ぶというのは、そういう意味で、言葉のもつ力というか、あるいは、言葉に子どもたちがどういうふうな反応をするか、ということをお考えになっておられると思うのですが、どういう難しさがあるんでしょうか。

松岡 うーん、ともかく言葉をいじっているのが好きなものですから、苦にはなりませんけれど。私が翻訳をしたりものを書いたりす

るときに一番力になっている自分の中の体験というのは、子どもにお話を語ってきたことだと思っています。子どもにお話を語るときは、目の前で子どもがいろいろな反応を見せてくれますから、子どもの受け止め方がわかって、お互いの気持ちのやりとりの間合いのようなものがなんとなく身についてきます。それから、私の場合は、「音としての言葉」というものがものすごく気になります。

長尾 それは非常に大事ですね。

松岡 音の面を一所懸命考えているかな、と思います。文章を書くときは何度も何度も声に出して読みますし、それから、ちょっといわくいいがたいのですが、たとえば「ここに2音くらい音が入るとこの文章はすごくおさまりがよくなるんだけど」というように感じることはあるのです。翻訳するとき、原文にそういうふうに書いていなくても、ここに「やがて」という言葉が一つあると、音とその時間が合って、文章が一つの波みたいになってうまくいくのではないかと感じることもあって、とにかく音のことがとても気になります。

長尾 まずは発話というか、音が最初ですからね。文字で読んでいるだけでは、本当の意味でのコミュニケーションというか、言いたいことが伝わっていかない部分がありますから。おっしゃるように、発話をすることによって、トータルに受け止められるという、それは非常に大事ですよ。

松岡 たとえば、おかしいんですけど、「むかし、あるところに」という言葉でなくて、「ムームー、ムームー、ムームー」というように音だけで、自分の書いた文章を読んでみるとかね。そうすると、意味ではなくて、音の流れ(メロディ)が浮き立ってくる。そして、一つ一つの文章にもなにかうねりのようなものが出

て、ポイントになるところとか、流れるところとか、ちょっと上がるところなんかははっきりしてきて、この文章は耳で聞くと退屈だな、なんていうことがわかってきたりします。

長尾 そういうところに国民性もにじみ出てきてるんじゃないでしょうかね。英語と日本語では、発話して聞かせる場合にはずいぶん違うでしょうし。同じ小説でも、声に出して読んでみると全然雰囲気が違うんじゃないかと思っているんですけれどね。昔、『若きヴェルテルの悩み』をドイツ語で読んだりしたのですが、私フランスに1年間いたことがあります。その時にフランス訳を読んだら、もう全然雰囲気が違う。(笑)発話することによって、国民性というか、人間性が培われていく、という面があるのかなあと。

松岡 とても面白いお話ですね。私はほかの言葉はかじっただけなのでよくわからないのですが、英語は少し親しみましたので、ひどくくたびれているときに英語の詩を読むと元気になったりすることがあります。

長尾 エネルギーが湧き上がってくる、そういうところがありますよね。

松岡 为什么呢ね。呼吸でしょうか。

長尾 日本語の詩ではどうですか。

松岡 日本語の詩はあまり。(笑)どういうわけか、くたびれると英語の詩が読みたくなるので。自分では理由がわかりませんが、ある種の詩を読むと、気分がリフレッシュします。

長尾 ウィリアム・ブレイク³とか。力が出ますよ。

松岡 元気が出ます。人の朗読を聞いていてもそれはある程度起こるのですが、自分で声に出したときは、それを強く感じます。

長尾 日本語も、情緒豊かな日本語の発話あるいは詩とともに、力強い日本語というものも、これからの日本人は考えていかなければいけないと思っているんですが。

松岡 私がよく知らないだけで、日本語の詩にも、探せば力を呼び起こすものはいくらかもあると思います。私はNHKの「日めくり万葉集」という番組を愛聴しているのですが、万葉の歌を声に出して読むと、かっかとした元気ではないけれど、胸郭が広がるというか、のびやかな、開放された感じを味わえるものがありますよね。

長尾 ヨーロッパやアメリカでは弁論術というのがきちっとできていて、それに対して、日本も明治時代はそういうのを輸入して、議会・国会などでも弁論術的にやろうと試みた人もいたみたいですが、結局それは定着しなかったですね。

松岡 内容と別に「術」だけが入ったからいけなかったんじゃないでしょうか。

長尾 私なんかは、情緒豊かな表現とともに、力強い日本語、弁論術的にきちっとできるような日本語も養っていききたいなあ、養っていくといいんじゃないかなと思ったりしています。そういうものは、あまり子どもの本にはないですか。

松岡 すぐこれと思いつかぶものはありませんが、ただ、全体として、新しい作品はどうしても文章が短くなってきていて、軽いというか、少し落ち着かなくなってきたような気がしますね。一昔前の方がお書きになった文章のほうが、子どもにはいいかな、と思ったりします。なにかこう、気持ちの重心が下に来ると文章なんですね。今風の言葉は非常にテンポが速くてプツプツ切れてしまう、読んでいると、少し精神の重心が上がる

³ William Blake (1757-1827) 英国の詩人・画家。おもな著作に『ブレイク詩集』(岩波書店刊)など。

ような気がして、私などは落ち着きません。

長尾 ハートのどこかが上がってくるようなね。(笑)

松岡 ことに幼い子どものためには、少しお年を召した方の書いた文章を読んでもらったほうがいいと思います。

長尾 ところで、現在、全国の公共図書館でも、子どもたちに児童書、図書館になじんでもらうという運動がなされていると思うのですが、今後どういうふうにしていったらいいか、というあたりはいかがでしょうか。

松岡 国際的にみるとユニークだといわれているのは、日本の子ども文庫という活動なんですね。1970年代から80年代にかけて全国的に広がりました。その中には地域の公立図書館の設置を促す運動を盛り上げた人たちもいました。それが今、少子化で文庫に来る子どもたちが激減したものですから、閉じるところも出てきました。たとえ子どもが一人しか来なくても細々とやりましょうという人もいますが、逆に子どものいるところ、つまり学校へ出かけて行って、ボランティアとして子どもにお話をしたり、本を読んだり、学校図書館の仕事を手伝ったりする人が増えています。民間の人たちが子どもの読書に関心をもって、これだけの時間とエネルギーを使っているという国はちょっとほかにはないんじゃないでしょうか。こういう人たちと公立図書館をはじめとする公的教育機関が上手に協力することがとても大事だと思います。

長尾 そうですね。

松岡 公立図書館は、今、予算が減らされているところが多いし、委託を選択するところもあって、ちょっと不安定な状態になっていると思います。でも、日本人は、全体としては、子どものために何かやろうという気持ち

の強い国民だと思うんです。2002年から3年ほどかけて、伊藤忠記念財団と私どもの東京子ども図書館が合同で子ども文庫を調査したことがあるのです。その機会に担当者が文庫の歴史を調べてくれたところ、日本には、かなり古くから民間で文庫のようなことをやっていた人がいたことがわかりました。江戸時代にも寺子屋で本を貸す人がいたりするんですね。明治に入って、政府のほうでももちろん、外国の図書館を見てきて、図書館を作らなくちゃいけないという動きが出てくるんですが、それとは別に民間にも小規模の図書館を始める人がいたのですね。学校の先生とか、新聞社に勤めている人とか、お医者さんとか、そういう人が、自分の家に子どもの本を置いて、近所の子に貸したりしているのです。どうしてこういう例がいくつも見られるのか不思議ですけど、ものすごく感動的なんですよ。

長尾 そうですか。

松岡 たとえば弘前に独学で英語も勉強したという「インテリ魚屋さん」がいて、お店の奥に子どもの本を置いて、文庫をしていたそうです。前を通る子どもに「ちょっと、ちょっと」と手招きして本を貸してやるのですね。そこで本に出会った女の人が、のちに思い出を記していて、魚屋さんの前を通るときは「きょうはオドサ居るベカナ？」と、そっとのぞく。いると奥へ入れてくれ、『小公女』だの『ああ、無情』だのを貸してくれる。すぐ読んで返しにいくと、「もう読んだの、えらいなあ」とほめてくれたって。この話を読んだときは涙が出そうになりました。この魚屋さんは、まったく児童図書館員なんですよ。子どもたちに本を薦めて、言葉を交わして、前を通るたびに子どもが、その人がいるかな、とのぞくような関係を作っている、そういう人が

日本のあちこちにいたんだなあ、と思いました。自分の家の縁側に本を置いて近所の子どもに貸していたお医者さんとか、終戦直後から、お給料をもらうたびに神田の古本屋で本を買って焼け跡で遊んでいる子どもたちに届けていた銀行員の女の人とか、そういう人たちの事例がたくさん出てきたんですね。そういう草の根の民間の人たちによる子どもへの読書運動の歴史、伝統が日本の中にあるのかなと思うと、とっても心が温まります。

長尾 今もそういう活動をしてるんですね。

松岡 ええ。「本があるから寄っていきなさい」というおうちがあるのは、外国ではとっても不思議がられるんです。日本の生活水準の高さとか、平和とか、女性の高学歴化とか、いろんな要素が考えられますが、自発的に子どもの読書にかかわろうとする人たちが日本の社会の中のいろんなところにいるんですね。そういう民間の力を生かすことが、大事だと思います。

長尾 これはすばらしいですね。こうした草の根の力は今でも弱っていませんか。

松岡 働くお母さんが増えて、時間がないということもあるけれど、日本のお母さんというのは、ちょっと働きかければ動いてくださるポテンシャルをもっていらっしゃると思いますよ。実は、戦前の文庫をやっている人はほとんど全員男なんです。面白いことに、戦後は逆にほとんどが女性になってきたんですよ。今でも5千くらいは文庫があると思いますが、99%は女性によるものです。それは戦後の劇的な変化です。男性でかかっているのは、ご夫婦のことが多いです。

長尾 そうですか。それは大きな変化ですね。

ところで、国際子ども図書館は来年で開館10周年になりますし、ちょうど国民読書年にあたりますので、ちょっとした企画を考えて

います。日本の児童書が諸外国でいろいろ翻訳されて出ているので、そういうものを集めて、海外で日本の児童書がどんなふうに使われているかという展示会をやろうとしています。国際子ども図書館ができたときには、外国の児童書が日本語に翻訳されたものを展示しました。それと逆のことをちょうど10年たってやろうとしています。外国の児童書と日本の児童書がどんな関係になっていったらいいか、子どもの読書活動を国際的な視点から見たときにどんなふう考えたらいいか、ということはいかがでしょうか。

松岡 子どもの本には国境がない、ということがいわれています。ことに絵本の場合は、外国語に翻訳されて子どもたちにすごくよく読まれる例があります。ちょっと大きい子の本になると、文化的背景や社会状況といったものについての理解がないと難しいことがあるんですが、本当に小さい子どものためのシンプルな本では、だいたいどこの国の子どもたちも同じようなものが好きなんですよ。そこから始めると、いい国際的な理解の基ができるので、国際児童図書評議会などが、すぐれた子どもの本を他の国の言葉に翻訳することに力を入れていますから、世界の子どもたちが同じ本を共有する傾向はどんどん広まるのではないのでしょうか。この前、韓国に行ったときも、日本のめばしい本がほとんど韓国語に訳されていました。韓国の子どもたちは、それを日本の本だと意識して読んでいるとは思えない。おもしろいから読むんだと思うんですよ。そうして、知らず知らずのうちによその国の文化に親しんでいくのだと思います。互いを分け隔てする気持ちが芽生える前に、互いを理解する素地が作られていくのは大事なことだと思います。日本の絵本は、た

松岡

互いを分け隔てる気持ちで芽生える前に、互いを理解する素地が作られていくのは大事なことだと思います

くさん海外で出版されています。マンガが海外に広く受け入れられているように。国際アンデルセン賞⁴も、まど・みちお⁵さん、安野光雅⁶さん、赤羽末吉⁷さんと3人受賞なさっています。いっぽう児童文学作品のほうは、なかなか海外には出にくかったんですね。それは、日本の児童文学のある種の弱さみたいなものが関係していたかな、と思うんですけど。日本では、はっきり言葉に出して言わないでも察してくれる、というような文化があって、かっちり構成して、きっちりつめて書いていくのが得意でなくて、ちょっとほのめかして書くのを好むところがあります。そういうタイプの文学作品が、大人の場合も子どもの場合もありますが、そういうのは、なかなか子どもにはわからない。

長尾 なるほど。

松岡 ほのめかしというのは、自分のもっている経験に照らして、そこから何かをくみ取るということですから、その経験の量が決定的に少ない幼い子どもにとっては難しいのではないのでしょうか。ほのめかして、ちょっとセンチメンタルな情緒的なイメージだけを描くとか、具体的な事実は言わないで、そこから出てきた感情だけを描くような作品は、なかなか幼い子どもには受け入れられなくて、そのために、日本の児童文学が世界にそ

んなには広まらなかったのかな、と思うのです。これからは、小さいときに外国のファンタジーを読んで育ったような人とか、ちょっと違ったタイプの作家も出てくるでしょうから、そういう人たちの作品が翻訳される可能性もあるのではないのでしょうか。

長尾 東南アジアの人たちだと、わりと日本人のキャラクターに似ているところがあるので、日本の作品がきっと広がるのではないのでしょうか。児童書が大いに国内で出版されたり読まれたり、また、外国でも、広がっていくといいですね。

松岡 そうですね。今度の展示会も、どういうふうにできあがっていくか、楽しみです。

長尾 おもしろいテーマじゃないかと思えますので、いろいろアドバイスいただければ。よろしく願いいたします。きょうはいいお話をいろいろ聞かせていただきました。ありがとうございました。

対談を終えて

松岡さんは、大学卒業以来今日まで児童書や子ども図書館のために人生を捧げてこられた方である。われわれの国際子ども図書館の存在意義、位置づけについてのお考えは大変参考になった。子ども達の本に対する興味が以前と今とは随分変わってきているというご指摘は、大人だけかと思っていた私には驚きだった。松岡さんはその変化の原因をよく検討され、単に子どもに本を与えればよいといったことではだめであって、子どもと親との間にいわば対等の形でのコミュニケーションが成り立つように努力することが最も大切であると分析され、実践されていることに感銘を受けた。日本各地で子どもへの読書運動が行われているという話には大変勇気づけられた。その他、松岡さんとの対話から得られたものは実に多かった。(長尾)

(この対談は2009年9月16日に国立国会図書館国際子ども図書館で行われました。)

4 国際児童図書評議会が、2年に1度、児童文学の分野で卓越した業績をあげた作家および画家を表彰する賞。「小さなノーベル賞」ともいわれる。

5 1909年生まれ 詩人。1994年に国際アンデルセン賞作家賞を受賞。おもな作品に「ぞうさん」など。

6 1926年生まれ 画家・作家。1984年に『国際アンデルセン賞画家賞』を受賞。おもな作品に『ふしぎなえ』(福音館書店刊)『安野光雅・文集』(筑摩書房刊)など。

7 1910年生まれ 1990年逝去 絵本作家。1980年に国際アンデルセン賞画家賞を受賞。おもな作品に『スーホの白い馬』、『もたらう』(ともに福音館書店刊)など。

世界図書館情報会議－第75回国際図書館連盟（IFLA）大会 図書館が未来を創る 文化遺産を礎に



2009年8月23日から27日にかけて、世界図書館情報会議－第75回国際図書館連盟（IFLA）大会が、イタリアのミラノで開催されました。イタリアは、80年前の1929年に第1回目のIFLA大会が行われた国でもあります。127か国から3,000名以上が参加した*この大会に、日本からは、長尾真館長を団長とする国立国会図書館派遣団7名を含め、50名以上の参加がありました。

IFLAとは

IFLAは図書館および情報サービスに関する世

界最大の組織です。1927年に創立され、現在150か国に会員1,600機関を擁しています。テーマ別に設けられた40以上の分科会や、最優先課題である六つの分野（資料保存、第三世界における図書館振興、著作権等法律問題、情報へのアクセスの自由と表現の自由、書誌データの国際互換フォーマットであるUNIMARC、書誌標準に関するIFLA-CDNL同盟）のコア活動などを通じて、世界の図書館界の様々な課題に取り組んでいます。

国立国会図書館は1966年IFLAの準会員に、1971年に会員になって以来、その活動に協力してきました。また資料保存コア活動アジア地域センターとして保存協力活動を行っています。

* IFLA Express no.8 (2009.10) <http://www.ifla.org/annual-conference/ifla75/xpress8-en-2009.pdf>



第 75 回 IFLA 大会

今年の大会は「図書館が未来を創る 文化遺産を礎に」をテーマとして開催されました。分科会等によるセッションを中心に、展示会やポスターセッション等多くのプログラムが行われました。本大会の前後には、イタリア国内各都市や近隣諸国で 17 のサテライトミーティングが開かれました（次ページ以降に国立国会図書館派遣団の報告）。また、26 日には第 36 回国立図書館長会議（CDNL）が開催されました（本誌 584（2009 年 11 月）号 pp.4-5 参照）。

26 日、27 日には総会が開かれました。27 日の閉会式では、新会長に就任するエレン・タイ

ス（Ellen Tise）氏から挨拶がありました。また、2012 年大会がヘルシンキ（フィンランド）で開催されることが発表されました。なお、2010 年大会は、ブリスベン（オーストラリア）に代わりイエテボリ（スウェーデン）、2011 年大会は、サンファン（プエルトリコ）で開催される予定です。2013 年大会は、東南アジアかオセアニアでの開催が検討されています。

大会期間中には、IFLA 参加者や現地の図書館員等が参加したサッカートーナメントが開催されました。IFLA のウェブサイト動画が公開されています。

（国立国会図書館 IFLA ミラノ大会派遣団）

国際的な協力関係の構築

政府機関図書館分科会と国際協力担当者会合

ローラー ミカ

政府機関図書館分科会常任委員会

8月22日と26日に開催された政府機関図書館分科会常任委員会に新任の常任委員として参加し、昨年英語版が刊行された「IFLA 政府機関図書館のためのガイドライン」の日本語版を国立国会図書館で準備中であること等を報告しました。また、議論の中では、日本の政府図書館、つまり当館の支部図書館についても話題となり、将来的には支部図書館からの大会発表を期待する声が聞かれました。

国際協力担当者会合

8月25日には、今回新たに国立図書館分科会の下に設置された、国レベルの組織における国際連携 SIG (Special Interest Group) に参加しました。この会合は、人的ネットワーク形成、経験の共有、各組織の内外において国際協力活動の意義を広めること等を目指しています。戦略的課題班と具体的課題班に分かれてグループ・ディスカッションを行い、その結果を全体に報告しました。筆者は戦略的課題班に参加し、国立国会図書館は国立図書館としてビジョンを持って活動しており、国際協力活動はそれに資するために行っていること、当館に限らず国立図書館では電子図書館関係の国際活動が中心になってきていること、各業務担当者が国際活動に参加するにあたり、言語面をはじめとして困難を感じており、国際協力

担当者にはそのサポートも求められていることをコメントしました。他班からの全体会議への報告の中でも、国際協力活動は組織目標達成の重要な手段であるという認識が示され、また組織の内外におけるあらゆる方面とのコミュニケーションの重要性が指摘されました。

国際協力関係者の名簿を作成することが確認され、また、来年の会合へ向けて、前 IFLA 事務局長ピーター・ロー氏を中心に国際協力活動の現況調査を実施することが承認されました。協定・覚書作成のためのガイドライン等の必要性も指摘されました。

このほかにもパネル・ディスカッション形式で行われた IFLA 会長会合、IFLA 最高意思決定機関である総会等に参加し、別途中国・韓国の国立図書館との課長会合も行いました。近年、IFLA ウェブサイトに発表論文が掲載されることから、会議参加の意義を問い直す声がありますが、IFLA 大会ではこのように原稿のない多くの活動が行われており、まさに大会に参加すること自体が国際協力活動の一環であると強く感じています。



総会で発言するルクス IFLA 会長

(ローラー ミカ 総務部支部図書館・協力課長)

民主主義のためのデジタル情報

議会のための図書館・調査サービス分科会

矢部 明宏

プレコンファレンス (8月19日～21日)

議会のための図書館・調査サービス分科会(議会図書館分科会)の第25回プレコンファレンスは、8月19日から21日にかけて、「民主主義のためのデジタル情報:管理、アクセスおよび保存」をテーマに、ローマで開催されました。68か国の議会、14の国際機関から約200名の参加者がありました。

二院制をとるイタリア議会には、上下両院に図書館が置かれています。2007年には、総合的なサービスを提供するために、両院図書館から構成される連合議会図書館が設立されました。

19日と20日には、イタリア議会関係者から、連合議会図書館の設立を中心に、図書館・調査サービスの進展についての報告が行われました。連合議会図書館では、設立後、上下院図書館共通のOPAC(オンライン蔵書目録)の構築、資料貸出規則の統一、資料の分担収集などが実施されまし

た。また、国政審議を支える仕組みも強化され、議会図書館、議会予算部などの複数の組織が密接に連携して審議参考資料を作成しています。特に、主要分野(財政、外交、地方自治)については、これらの組織が共同で文献センターを設置し、外部の専門機関とも協力しながら、調査資料の作成やセミナーなどを行っています。

20日には、分科会役員から、分科会の活動報告、ほぼ完成した「議会図書館のためのガイドライン」についての紹介や「議会図書館におけるICT(情報通信技術)の利用に関する調査結果」の報告もありました。最終日の21日には、韓国、ノルウェーなど7か国の議会図書館から、各国の現状についての報告が行われました。

IFLA大会(8月23日～27日)

24日に、議会図書館分科会と図書館史SIG(Special Interest Group)との合同セッション

連合議会図書館

連合議会図書館は、ローマ中心部のパンテオン近くに位置しています。かつての修道院を改装した建物を使用しており、当時の回廊や壁画がところどころに残っています。内部は大小の閲覧室と廊下が複雑に入り組んでいるため、会議場から会議場への移動中に、何度も迷子になりました。

英語ばかりの会議での疲れを癒してくれたのは、最上階の職員食堂での毎日の昼食です。食堂の半分は市内を一望できるサンルームになっていて、すぐ側のパンテオンや遠くのサンピエトロ大聖堂のクーポラを眺めながらの食事は格別でした。また、豊富なメニューや多様な食材からは、イタリアの食文化の豊かさと奥深さを感じました。(矢部)



連合議会図書館に残る壁画と回廊



24日のセッション

「変化するビジョン：議会図書館の過去、現在、未来」が開催され、英国、ニュージーランドなど7か国の議会図書館の歴史とその直面する課題について報告がありました。25日には、IT分科会、知識管理分科会との合同セッション「学習および知識共有のためのソーシャル・コンピューティング・ツール」が開催されました。ブログ、ツイッターなどの様々なツールが紹介され、チリおよびニュージーランド議会図書館から導入事例の報告がありました。26日にロンバルディア州庁舎を会場として行われたワークショップでは、議会図書館の組織運営上の様々な問題について活発な議論が行われました。

今回の会議を通じて、議会からの調査・情報要請の高度化にいかに対応するかをはじめ、各国の議会図書館が抱える共通の課題とその解決に向けての具体的な取り組みを知ることができました。現在、議会図書館の役割として、国民と議会（議員）

を結び付けることの重要性が広く認識されています。ウェブサイトによる情報提供機能の向上、議会文書のデジタル化および提供、施設の国民への開放は、各国に共通した動きです。また、議会図書館分科会は、各国議会の機能向上のため、特にICT分野において、国連、IPU（列国議会同盟）などとの協力を進めており、多国間協力の枠組みの多様化と深化を強く認識しました。

（やべ あきひろ 調査及び立法考査局次長）

食のイタリア？ バカンスのイタリア！

大会会期前半、参加者たちは昼食確保に苦勞した。会場内の小さな軽食コーナーと会場前のカフェ以外、近所に店が見当たらない。やむなく朝食の残りのパンやクラッカーを携帯し、昼はそれでした。少し慣れると、通勤途上のスーパーで食料を買えるようになった。写真は、その店の量り売りコーナー。買いたいものを載せてその絵のついたパネルを押すと値札が印字され、自分で値札を貼ってレジへ…というセルフサービス方式。

しかし会期終盤には、食糧事情は一変！周辺には実は店がたくさんあり、バカンスで閉まっていただけだったのだ。貼紙をよく見ると「25日まで休み」「27日から開けます」など。IFLAほど大きな会議が来るのに、それよりバカンスが大事だったらいい。（小林）



次々と刊行される書誌情報の基準・ガイドライン

書誌分科会、目録分科会

原井 直子

IFLA では書誌情報の標準化のためのさまざまな活動が行われています。新しい基準やガイドラインの刊行が集中した今年の大会で、その内容を紹介するセッションに参加しました。

書誌調整部会オープンセッション(8月27日)

今年刊行された「典拠¹データの機能要件 (Functional Requirements for Authority Data: FRAD)」、「電子時代の全国書誌²のためのガイドライン」、「多言語シソーラス³のガイドライン」、「国際目録原則覚書」という四つの基準・ガイドラインの紹介がありました。

そのうちの「国際目録原則覚書」は、2003年～2007年に5大陸で開催された会議を経てまとめられた新しい目録に関する国際標準です。この会議には、日本からも含めて総計320人ほどの専門



家が参加し、覚書の策定は大変な事業でした。セッション終了後に刊行を祝してシャンパンとクッキーが振舞われました(写真)。

書誌分科会オープンセッション(8月23日)

ネットワーク上で「全国書誌」がどのように機能するのかについて、イタリアの実例が紹介され

ました。今年刊行された「電子時代の全国書誌のためのガイドライン」とあわせて考えると参考になるものです。また、図書館の境界を越えて博物館、文書館等とデータを交換し連携していくための活動の実例も紹介されました。こちらは、大会のテーマ「図書館が未来を創る 文化遺産を礎に」に即した内容でした。

目録分科会オープンセッション(8月24日)

2007年に刊行された「国際標準書誌記述⁴」(International Standard Bibliographic Description: ISBD) 統合版予備版の改訂作業が進められています。新たに設けることになった「エリア・ゼロ：内容形態と媒体タイプ」についての検討状況が報告されました。また、ウェブ環境に適応していくために、ISBDのXML⁵化プロジェクトが始まっています。

(はらい なおこ 収集書誌部司書監)

*書誌関係のセッションについては、『NDL書誌情報ニュースレター』2009年3号 (http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/bib_newsletter/2009_3/index.html) もご覧ください。

- 1 図書館目録における著者名や件名(資料のテーマを表すキーワード)の統一形を定めたもの。特に著者名は、ある著者名が資料に異なる形で表示されていても、書誌データに典拠データが付与されていれば、網ら的に検索することができる。
- 2 ある国の出版物(広義にはその国に関する著作やその国の言語で書かれた出版物等を含む)の記録。
- 3 語句どうしの関連性(上位・下位概念、関連語など)を示したキーワードの辞書。図書館においては、件名をシソーラス化して検索に役立てる方向にある。
- 4 図書館目録として記録すべき要素の種類とその記録の順序等について国際標準を定めたもの。
- 5 文書やデータの意味・構造を記述するためのマークアップ言語の一種。

多角的にとらえる資料保存

資料保存コア活動、IFLA 資料保存分科会関連会議

岡橋 明子

IFLA 大会

筆者は、資料保存分科会常任委員として同常任委員会（8月22、25日）に出席したほか、資料保存コア活動（PAC）センター長会議（8月26日）や関連するオープンセッションに参加しました。

資料保存分科会常任委員会では今後の活動について検討しました。次回大会では、環境負荷が少なく持続性の高い資料保存のあり方をテーマに、環境に影響を及ぼさない資料管理の手法や IPM* 等に関する発表者を募ることになりました。

PAC センター長会議では、2008年度の活動について各地域センター長（代理を含む）から報告があり、バリラ国際センター長からは、「PAC 戦略計画 2009 - 2011」として、図書館の枠にとられず国連気候変動サミット等の国際会議にも広くかかわること、博物館・文書館との連携強化に努めること等の課題が示されました。

また、資料保存分科会と他の分科会の合同で行うセッションを中心に複数のオープンセッションに参加しました。PAC 主催のセッションでは、最新の大量保存技術や環境管理、保存を目的としたデジタル化事業、米国博物館・図書館情報サービス機構（Institute of Museum and Library Services: IMLS）が展開する保存支援事業等について発表がありました。いずれも緻密な調査結

* Integrated Pest Management（総合的有害生物管理） 人体や環境保護のため可能な限り薬剤に頼らず、複数の方法を組み合わせ管理する文化財保存の考え方。

果に基づく総合的な観点に立った報告内容で、全体としては、様々な機関での資料保存の取組みがバランスよく構成されており、多くの参加者を集めていました。

サテライトミーティング



保存分科会・PAC 共催のサテライトミーティングは、本大会終了後の8月31日から9月2日にかけてローマ市内にある文書・書籍遺産修復保存研究所（Istituto Centrale per il Restauro e la Conservazione del Patrimonio Archivistico e Librario: ICPAL）において開催され、120名を超える参加者が集まりました（写真）。「文化遺産としての図書館資料の保存」をテーマに、「イタリア国内の保存活動」、「博物館・博物館・図書館における大規模デジタル化と保存」、「文化遺産としての図書館資料の展示」の3セッションと、ICPAL内の博物館や国立リンチェイ学会図書館（Biblioteca della Accademia Nazionale dei

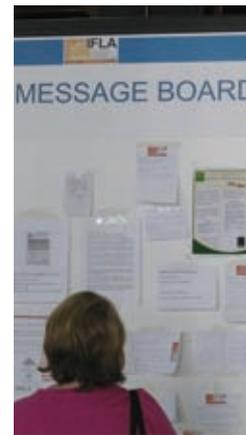
Lincei) 等の見学が行われ、デジタル化に関するセッションでは、スキナーメーカー3社と、各社が開発したロボットスキナーを用いたデジタル化事業に取り組む図書館2館が発表を行いました。発表後のパネルディスカッションではメーカーとユーザー双方からの意見や提案が飛び交う中、参加者からも多数の質問が寄せられ、関心の高さがうかがえました。

(おかはし あきこ 収集書誌部資料保存課)

恒例の伝言板

会期中、会場には伝言板が設置され、予定のないミーティングのお知らせや情報提供を求める声などを伝えます。これほど多くの図書館関係者が顔を合わせる機会はなかなかないので、参加者は情報収集に必死。デジタル時代のIFLA大会でも、用件を紙に書いてテープで貼るといったアナログ伝言板が、大活躍です。

(小林)



ドゥオーモ

ドゥオーモ（大聖堂）は、イタリア各地にあります。ミラノのそれは、最も有名なものの一つです（写真左）。その巨大で荘厳な姿は、森鷗外訳『即興詩人』に、「大理石もて、人の力の削り成しし山ともいふべく、…幾多の塔尖より石人の形の現れたるさま、この世に有るべきものともおもはれず。」と形容されています。ドゥオーモは、今大会のシンボルになりました。大会のロ



ゴマーク（ページ上部参照）に使用され、25日のソーシャルイブニングでは、ドゥオーモを中心にして、クラシックコンサートなどが催されました。現在、ミラノは、芸術、ファッションの町として有名ですが、イタリアにおける出版の中心地でもあります。それを象徴するように、ドゥオーモの近辺には、いくつもの立派な書店がありました（写真右）。（矢部）

「読書人の国を造る」

児童・ヤングアダルト図書館分科会

小林 直子

読書人の国を造る (Raising a Nation of Readers) ——大志を感じるこのタイトルは、筆者が参加した児童・ヤングアダルト図書館分科会 (以下、児童 YA 分科会) と読書・リテラシー分科会の共催したプレコンファレンスに冠せられたものです。筆者は、児童 YA 分科会の常任委員会委員として関連の会合に参加しました。

プレコンファレンス

上記の2分科会の共催によるプレコンファレンスは、8月19～20日の2日間、ローマで開催されました。地元イタリアを中心に23か国から150名弱が参加し、計17本の発表が行われました。「読書人の国を造る」ために、子どもが小さいうちから働きかける事例の紹介 (ブックスタートなど) が目立ったほか、読者を育てる働きかけに携わる発表者に、小児科医やマーケティングの専門家が含まれていたことが印象的でした。

プレコンファレンスに合わせて、「世界の赤ちゃん絵本」の展示も行われました。23か国から300冊以上の0～3歳向けの絵本が集められ、参加者たちは、発表の合間に熱心に、楽しげに入っていました。

常任委員会

児童 YA 分科会常任委員会は、8月22日と25日に開催されました。中心となった議題は、姉妹

都市ならぬ「姉妹図書館」——言語が同じ二つの国の図書館が交流することにより、児童図書館員の活動の幅を広げ、その図書館の利用者である子どもが国際的な体験をすることを目指すという分科会の新規プロジェクトです。具体的には、同じ本を読んで感想を交わし合う、人気のある本を交換して展示会をする、といった交流活動が提案されました。早急に2～3組の交流館を決めてパイロットプロジェクトを実施し、次回のIFLA年次大会でその成果を発表することになりました。

オープンセッション

8月24日午後には、児童 YA 分科会と図書館建築分科会合同のオープンセッションが開催されました (写真)。珍しい組み合わせですが、参加者450名という大盛況で、日ごろとは違う視点で児童図書館をとらえ直すことができる有意義なセッションでした。7本の発表論文はIFLAのウェブサイト



に掲載されており*、魅力的な児童図書館の写真を多数見ることができます。

(こばやし なおこ
国際子ども図書館児童サービス課長)

* <http://www.ifla.org/annual-conference/ifla75/programme2009-en.php>

人と人とのつながりから生まれるもの



見学先(本誌 pp.20-21 参照)で、保存容器について説明を受ける

今年の IFLA (国際図書館連盟) ミラノ大会では、90 に近い公開セッションのほか、展示会やポスターセッションが連日行われました(本誌 pp.14-22 参照)。関係するセッションに参加し情報を収集するだけでも十分勉強になりますが、自分自身が情報を発信する側、あるいは情報が交換される場の作り手になると面白さは格段に増します。たとえば分科会の常任委員になって IFLA の活動や大会の運営に携わってみる。世界的な議論や関心の的になっているテーマについて研究発表を行ったりニュースレターを発行したりと、各分科会は日頃からそれぞれ知恵を絞っています。来年の年次大会のように、開催地がオーストラリアのブリスベンから急遽^{きょ}スウェーデンのイエテボリに変更となると、参加者の顔ぶれはがらりと変わり、企画し

たセッションのテーマや内容を改める必要も出てくるので、分科会はその調整に追われます。大会にあわせて行われる分科会常任委員会では、メールでは詰められない事項について議論し、打ち合わせます。なかなか大変な任務ですが、世界各地で共通の課題に取り組む人々の活発な交流によってそれぞれの分野の発展が進むのなら、大きなやりがいがあるというものです。

人と人とのつながりから生まれるものを尊重し、分かち合う精神は、大会中のあらゆる場面で見られます。初めて大会に参加する者を対象とした歓迎セッションでは、壇上から会場に向かって地球をかたどった小さなボールがいくつも投げられました。ボールを受け取った者は遠くの誰かにボールを投げ、それを受けた者がまた別の誰かに投げ返します。受け損なっても投げ損なっても、誰かがきっと代わりに拾ってくれます。

IFLA の活動は、地球規模かつ全方向型のキャッチボールのようなものです。大事な



は、受けたり返したりするための腕を思い切り大きく前に伸ばしてみることでしょう。

(資料保存課 資料保存分科会常任委員)

第7回（最終回） 資料にあわせた書架の利

国立国会図書館の所蔵資料には、本、雑誌などの冊子のほか、マイクロフィルム、レコード、一枚ものの地図など、さまざまな形態のものがあります。本の中でも、高さ1mを超えるものから3cmほどの豆本まで、大きさも色々です。

書架への収め方を工夫することで、これらの資料を書庫内の限られた空間に効率よく配置しています。今回はこれらの工夫をご紹介します。



■ 書架への収め方

利用と保存の両立を考慮し、資料は請求記号順に立てて収めています。収納効率と劣化防止とを考慮し、高さや幅が30cmを超えるものや特に大きいものは、別にまとめて置いています。

※関西館では、図書を大きさで分類し、同じ大きさのものをまとめて置くようにしています。

地図、製本した新聞など大型のものは、それ自体の重さで変形、破損しないよう、棚板を細かく分け、あまり重ねないようにして横に置いています。また、背のタイトルを手前に向け、出し入れにも考慮しています。



大きさを比較するため、手前に本誌を置いています



■ 閲覧室の書架との違い

書庫内の書架は、床から天井までを最大限に使い、通路の幅を最小限に抑えるなど、収納を第一に考えた構造になっています。一方、資料室の書架は、利用に配慮して配置しており、下段の資料が見やすいよう角度がついているものもあります



■ 書架を資料にあわせる

収めるものの大きさにあわせて棚の高さを調整し、無駄のない収納を心がけています。書庫のほとんどの棚板は取外しが自由で、支柱には穴が開いており、棚板の高さを自由に調節できるようになっています。



棚板を外して引出しを設置し、キャビネットとして使用することもできます（右段 地図の写真参照）。

立てた状態の資料が斜めになると、一か所に力がかかり傷んでしまいます。これを防ぐため、仕切り板や倒れ止めの金具（ブックサポート）を多く使用しています。



■ こんなものは？

冊子以外の多種多様な資料を、劣化を防ぎつつ、効率よく、また利用しやすく保管するため、資料によって収納方法を工夫しています。



文書
(古い手紙など)
封筒に入れます。

マイクロフィルム
1巻ごとの箱を、奥のものが取り出しやすいよう、さらに大きな箱に入れます。



マイクロフィッシュ
1枚ずつ封筒に入れ、立てて箱に入れます。

地図
広げた状態で引出しに収めます。



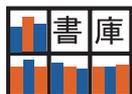
レコード
専用のキャビネットに、少しずつ横に重ねて置きます。



豆本 (小さい本)
小分けして箱に入れます。

書架についてより深く知るために

- 『図書館施設と設備』三浦道雄著 コロナ社
1970 <請求記号 UL521-1>



連載「国立国会図書館の書庫」のこれまでの記事については、巻末の索引(本誌 p.36)をご覧ください。

(総務部総務課)

本屋に ない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

公立図書館・文書館・博物館 協同と協力の動向

垣口弥生子、川崎良孝 訳 京都大学図書館情報学研究会刊
(KSP シリーズ 7)
〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院教育学
研究科内
2008.12 68頁 26cm <請求記号 UL531-J2>

本書は、2008年に国際図書館連盟(IFLA)が出した専門レポート第108号の邦訳として、精力的に海外の図書館情報学関連文献を翻訳・紹介している京都大学図書館情報学研究会が刊行したものである。原著者の3人はすべてカナダの図書館関係者で、2008年にケベック市で開かれたIFLA第74回年次大会での発表を意識してまとめたものようである。

英国博物館・図書館・文書館国家評議会(MLA 2000年)および米国博物館・図書館サービス機構(IMLS 1996年)の設置、カナダの国立図書館と国立公文書館の統合(2004年)などが象徴するように、近年世界的に、Museum(博物館・美術館)、Library(図書館)、Archives(文書館・史料館)の連携・協力(いわゆるMLA連携だが、この三つをどういう順番で並べるか正式に決まっているわけではない)が、国および地域レベルで話題になっている。各分野における史資料のデジタル化がその大きなきっかけになったことは間違いないが、国または地域レベルでの国民・住民への情報提供機能、地域コミュニティの拠点づくり、社会的プログラムの推進、文化情報資源の保存など様々な背景があることも確かである。

本書は、このMLA連携が実際に世界各地でどのように実施されているか、文献調査、関係者インタビューおよび電子メールでの問い合わせを通じて明らかにしようとしたものである。調査対象は欧

州、米国、カナダを中心に50館以上に及ぶが、残念ながらアジア諸国は入っていない。調査結果から得た連携事例を大きく、プログラムの協同作成、電子資源での協同、共同利用施設と統合施設、の三つのパターンに分類

し、それぞれの連携内容について簡単に紹介をしたのが本書の中心部分となっており、ほかにかなりまとまった参考文献が付されている。

日本でも、本年10月にNPO知的資源イニシアティブがMLA連携をテーマとするラウンドテーブルを開き、12月にアート・ドキュメンテーション学会が創立20周年記念「MLA連携の現状、課題、そして将来」と題する大規模な研究フォーラムの開催を予定しており、その関心が高まっている。

これまで三者連携の理念的・理論的な紹介は少なくなかったが、実際にはどうなっているのか、なかなか海外の事例を知ることは難しかった。その意味で、本書の刊行はとても時宜にかなったことといえよう。

なお、表記上の問題であるが、本書で訳者はpublic libraryを公立図書館の表記で統一しようとしている。そうすると公立でないところは「ユダヤ人パブリック・ライブラリー」(カナダ・ケベック州)のようになってしまい、不自然な感じは免れない。主義主張は別として、素直に「公共図書館」と表記した方が良かったのではないだろうか。

やなぎ よしお
(柳 与志夫)



板橋と光学 国産フィルム発祥の地 光学王国 企画展

板橋区立郷土資料館刊
〒175-0092 板橋区赤塚 5-35-25
2008.9 87頁 30cm <請求記号 DL454-J4 >

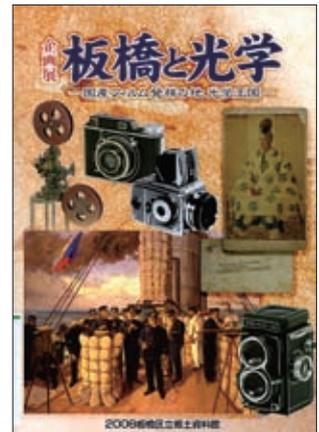
本書は、板橋区における光学産業について取り上げた板橋区立郷土資料館の企画展「板橋と光学—国産フィルム発祥の地・光学王国—」の展示図録である。

まず目を引かれるのは、カメラや双眼鏡など、名機といわれる製品を中心とした400点余りの写真である。今では骨董品の部類に入らざるを得ない二眼レフや蛇腹式カメラなどが豊富に掲載されている。1950年代に製造されたフィルム式の一眼レフカメラも多く、その姿からは、デジタルカメラでは味わえない職人の魂が感じられ、シャッターを切る時の機械音が響いてくるようである。また、カメラが好きだった徳川慶喜が撮影したという明治30（1897）年頃の板橋区内の写真なども掲載されている。

また、本書では、板橋区と光学産業の関係をたどることができる。板橋育ちの私は、小学校の社会の授業で、高層団地群として有名な高島平について教わったり、清掃工場や近所にあるアーケード商店街には社会科見学に出かけたりしたが、光学産業について習った記憶はない。しかし、板橋区と光学産業は深いつながりがあるのだそうだ。

そのつながりは、昭和初期にまでさかのぼる。日清戦争や日中戦争の頃は、双眼鏡が軍用の光学機器として重要な役割を果たしており、それまでは輸入に頼っていた双眼鏡を国内で生産することとなった。陸軍の要請によって設立された東京光学機械株

式会社が、おもな納入先の陸軍兵器補給廠の近くである板橋区志村に昭和8（1933）年に移転したのである。この双眼鏡の製造をきっかけにして、カメラ、レンズ、フィルムなど光学関係の工場が区内に集まることとなっ



た。第二次世界大戦後は、光学産業の技術力が海外からも高く評価され、双眼鏡やカメラの輸出が急速に増えていった。昭和37～38（1962～1963）年には、日本の主要精密機器の出荷額の7割は板橋区で製造されていたといわれている。先に触れたカメラや双眼鏡の名機たちも、板橋区内に本社工場のあった会社が製造したものである。

現在では双眼鏡の多くが輸入品となり、カメラメーカーも区外に移転している。しかし、今でも光学産業や精密機器における独自の高度な技術をもった工場は数多い。製造品出荷額や従業者数では、板橋区は東京23区中、大田区に次いで2位となっている。区も工場などを見学する産業観光バスツアーを企画して新聞でも取り上げられた。光学産業をきっかけにして「ものづくり」という板橋区の隠れた魅力を発見するのにおすすめの一冊である。

さとう りょう
(佐藤 令)

国民読書年プレ・イベント



「パンセ」を朗読する長尾館長

10月27日「文字・活字文化の日」に、東京本館新館講堂において、財団法人文字・活字文化推進機構との共催により「言葉を楽しむ日—言葉の美しさを伝え合う—」と題するイベントを実施した。

プログラムは3部に分かれ、「私が選んだ1冊」として、福原義春氏（文字・活字文化推進機構会長）をはじめ、田中真紀子氏（衆議院議員）、角野栄子氏（作家）、長尾真（国立国会図書館長）など8名が本を朗読したほか、山根基世氏（有限責任事業組合「ことばの杜」代表、元NHKアナウンス室長）と広瀬修子氏（「ことばの杜」、元NHKアナウンサー）のトーク、桂文我氏（落語家）の講演があった。参加者は約310名であった。

納本制度審議会

オンライン資料の収集に関する小委員会(第1回)



11月19日、東京本館において、納本制度審議会オンライン資料の収集に関する小委員会の第1回が開催され、同審議会委員4名および専門委員5名が出席した。

小委員会では、10月13日の第17回納本制度審議会において国立国会図書館長が行った諮問「国立国会図書館法第25条に規定する者（私人）がインターネット等により利用可能とした情報のうち、同法第24条第1項に掲げられた図書、逐次刊行物等に相当する情報を収集するための制度の在り方について」を受けて、調査審議を行った。当館からは、収集の対象となる資料の範囲、収集方法、利用にあたっての想定、経済的補償の要否など、オンライン資料の制度的収集に関する論点全般を提示し、それに対して委員および専門委員によって活発な議論が交わされた。

なお、年度内にさらに3回の小委員会を開催し、そこでの検討をふまえて審議会において中間報告を取りまとめる予定である。小委員会の構成および議事録は、国立国会図書館ホームページ（<http://www.ndl.go.jp/>）>「納本制度」>「納本制度審議会」に掲載する。

■ 平成 21 年度
児童サービス連絡会

10月21日、国際子ども図書館において、標記連絡会を開催した。都道府県立図書館における児童サービス活動の現状と課題を把握して情報共有を図り、連携・協力を強化することを目的として、3か年連続で開催したもので、今回が最終回であった。参加館は、石川県立図書館（今回は欠席）、大阪府立中央図書館、岐阜県図書館、群馬県立図書館、東京都立多摩図書館、徳島県立図書館、福岡県立図書館、福島県立図書館、山口県立山口図書館の9館であった。今年度のテーマは「公共図書館への支援の実際と課題」とし、市町村立図書館への貸出し、研修、情報通信技術を用いた連携、子どもの読書に関する情報発信等の項目に関して事前にアンケートを実施し、その結果に基づいて各館の取組みや課題を話し合った。今後もこうした交流の機会を作ってほしいという声があった。

アンケート結果は、国際子ども図書館ホームページ（<http://www.kodomo.go.jp/>）>「展示会・イベント」>「イベントのバックナンバー」に掲載している。連絡会の詳細については、『国際子ども図書館の窓』10号（2010年3月刊行予定）で紹介する予定である。

お知らせ

■ 電子展示会 「江戸時代の日蘭交流」が 始まりました

12月16日に、電子展示会「江戸時代の日蘭交流」の提供を開始しました。本年（2009年）は、日本とオランダの通商が始まって400年目にあたります。この機会に、国立国会図書館とオランダ王立図書館は、日蘭交流をテーマとした電子展示会をそれぞれ行うこととしました。

日本が鎖国政策をとっていた江戸時代、オランダは西洋の文化を知るための重要な窓口でした。この電子展示会は、日蘭の交流の歴史を概観する第1部と、個々のトピックを取り上げて紹介する第2部により構成されています。第2部では、「来日外国人の日本研究」、「蘭学者の業績」、「海外知識の受容」などのトピックについて、関連資料をご紹介します。詳細は、本誌次号をご覧ください。

解説のページ各所にオランダ王立図書館作成の電子展示会へのリンクも張っておりますので、二つの展示会を合わせてお楽しみください。

○ URL <http://www.ndl.go.jp/nichiran/>

国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>)

>電子展示会>江戸時代の日蘭交流（英語版もあります）

○お問い合わせ先

国立国会図書館 主題情報部参考企画課情報サービス第二係

電話 03(3506)5260（直通）

※オランダ王立図書館の電子展示会“The Netherlands – Japan”は、こちらをご覧ください。

URL http://www.geheugenvannederland.nl/?/en/collecties/nederland_japan/





お知らせ

■ 資料の大規模 デジタル化に伴う 原資料の利用停止 について

デジタル化作業のため、東京本館および国際子ども図書館で次のとおり一部の資料の利用を停止します。

作業終了後も、当分の間は原資料を提供し、順次、デジタル形式でご利用いただけるよう準備を進めていきます。詳細については、国立国会図書館ホームページや館内掲示等でお知らせします。

国立国会図書館では従来、劣化した資料の保存と利用の両立を図るため、マイクロ形態に変換してきましたが、近年のデジタル技術の発達に伴い、平成21年度から、媒体の変換手段についてはデジタル化を基本とすることとしました。著作権法の改正により、当館においては、資料の損傷等を避けるため、原資料に代えて利用に供する目的でデジタル化することが可能となったところです。

利用者の皆様にはご不便をおかけしますが、ご理解とご協力をお願いいたします。

●東京本館

- ・戦前期に刊行された和図書の一部 約7万3千冊

利用停止期間：平成22年2月～9月（予定）

*請求記号が400～799で始まるもの（旧函架）、カタカナのア～ンで始まるもの（講義録）、特8～72で始まるもの（明治期乙部図書）等の一部

- ・戦前期に刊行された和雑誌の一部 約2万7千冊

利用停止期間：平成21年12月～平成22年9月（予定）

*請求記号が「雑」で始まるもの（雑函）の一部

- ・明治以降に刊行された和図書の一部（古典籍資料室所蔵） 約1万冊

利用停止期間：平成21年12月～平成22年9月（予定）

*請求記号が100～249、820～899で始まるもの（旧函架）、十二支で始まるもの（十二支函）、「い」「ろ」「は」…で始まるもの（いろは函）、「京」で始まるもの（京函）等の一部

●国際子ども図書館

- ・昭和30年以前に刊行された児童書の一部 約2千冊

利用停止期間：平成21年12月～平成22年4月（予定）

*請求記号が「児」および「Y」で始まるもの一部

※ご来館の際は、事前にNDL-OPAC（国立国会図書館蔵書検索・申込システム <http://opac.ndl.go.jp/>）で利用可能かどうか確認されることをお勧めします。

お知らせ

■ 関西館小展示第4回 「冬季オリンピック」

第21回冬季オリンピックが、2010年2月12日から28日までの17日間、カナダのバンクーバーで開催されます。

関西館では、これに合わせて冬季オリンピックをテーマとした小展示を行います。

今回の展示では、冬季オリンピック第1回シャモニー・モンブラン大会から第17回リレハンメル大会までの足跡を写真を中心に記録した『近代オリンピック100年の歩み』をはじめ、1972年に開催された第11回札幌大会の公式報告書、1998年に開催された第18回長野大会の公式写真集など、冬季オリンピックに関する資料を幅広くご紹介します。また、『オリンピック事典』や中国語で書かれた『奥林匹克運動百科全書』など関連の事典も展示します。

入場は無料で、資料の大半は実際に手にとってご覧いただけます。この機会に、歴代オリンピック選手の活躍をふりかえてみませんか。

- 開催期間 1月21日（木）～2月27日（土）
（2月17日（水）および日曜・祝日は休館）
- 開催時間 10：00～18：00
- 場 所 関西館 総合閲覧室
- 入 場 無料



『第五回冬季オリンピック札幌大会』
第五回冬季オリンピック札幌大会実行委員会
〈請求記号 YD5-H-特 240-612〉
から 札幌会場の図
第5回大会は1940年に札幌での開催を予定していたが、日中戦争の深刻化により中止された。

お知らせ

■ 印画紙への引伸印画サービスの終了

複写サービスのうち、マイクロフィルムから印画紙への引伸印画を、平成22年3月末の引渡または発送分をもって終了します。

マイクロ用印画紙は平成20年3月に製造中止となっており、在庫分の印画紙が平成22年3月に有効使用期限を迎えるためです。

○申込受付の最終期日

来館でのお申込み（後日複写のみ）

複写の種類	東京本館	関西館	国際子ども図書館
撮影からの引伸印画	3/24（水）	3/16（火）	3/16（火）
マイクロフィルムからの引伸印画	3/27（土）		

遠隔（来館しない）でのお申込み

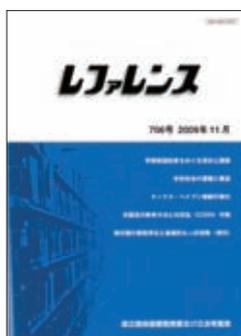
複写の種類	
撮影からの引伸印画	3/16（火）
マイクロフィルムからの引伸印画	3/16（火）

※上記は12月時点の予定です。印画紙の在庫状況等により、期日が早まる場合があります。

※遠隔でのお申込みでは、複写箇所の特定に時間を要することがあります。お早めにお申し込みください。

○お問い合わせ先 国立国会図書館 資料提供部複写課
〒100-8924 千代田区永田町 1-10-1
電話 03（3581）2331（代表）

■ 新刊案内 国立国会図書館の 編集・刊行物



レファレンス 706号 A4 130頁 月刊 1,050円 発売 日本図書館協会

- ・早期英語教育をめぐる現状と課題
- ・学校安全の課題と展望
- ・タックス・ハイブン規制の強化
- ・米国流の戦争方法と対反乱（COIN）作戦
- ・諸外国の課税単位と基礎的な人的控除（資料）

入手のお問い合わせ

日本図書館協会 〒104-0033 東京都中央区新川 1-11-14 03（3523）0812



国立国会図書館 館長対談

各界の著名人と国立国会図書館長が知識社会について語り合う。

第4回	デジタル情報社会が求める国立図書館の役割	カナダ国立図書館公文書館長	イアン・ウィルソン氏	574	①	: 4-8
第5回	本の未来、図書館の未来		東京大学教授 上野千鶴子氏	575	②	: 4-10
第6回	読書の力、本の力		文字・活字文化推進機構会長 福原義春氏	576	③	: 4-9
第7回	デジタル時代のスウェーデン国立図書館の挑戦	スウェーデン国立図書館長	グンナー・サーリン氏	577	④	: 6-11
第8回	古典と現代		大阪大学名誉教授 伊井春樹氏	578	⑤	: 4-10
第9回	主張する図書館へ	国際図書館連盟会長	クラウディア・ルクス氏	579	⑥	: 4-9
第10回	知識は力である	慶應義塾学事顧問、慶應義塾大学教授	安西祐一郎氏	582	⑨	: 4-10
第11回	持続可能で豊かな社会を	立命館大学教授、京都大学特任教授	佐和隆光氏	583	⑩	: 4-12
第12回	読書は本とのコミュニケーション		児童文学者 松岡享子氏	585	⑫	: 4-13



今月の一冊

国立国会図書館の蔵書の中から、貴重な本、美しい本、珍しい本、面白いエピソードがある本などを広く紹介。

年賀のあいさつ状		(鈴木宏宗)	574	①	: 2-3
オウィディウス『変身物語』(1717)	コーヒー・ハウスの詩人たちによる英訳	(斉藤真生子)	575	②	: 2-3
『子供マンガ新聞』終戦直後に発行された子供向けの新聞		(堀越敬祐)	576	③	: 2-3
幕末維新期のゴシップ合戦 朝倉無声旧蔵 十六画漢之模写縮像並ニ悪縁起		(藤元直樹)	577	④	: 2-3
メッゲンドルフアーのしかけ絵本 精巧なつくりこめられたユーモア		(江口磨希)	578	⑤	: 2-3
ニジンスキーのダンス・デッサン パレエ・リュスの舞台イラスト集		(金井ゆき)	579	⑥	: 2-3
蝶蛾鱗粉転写標本 100年前の翅のきらめき		(石田暁子)	580	⑦	: 2-3
尾尾屋於蝶三世談 江戸時代の怪談咄		(川本勉)	581	⑧	: 2-3
『ヤボン・モフビリー』世界ノ回教諸国ニ日本ヲ紹介スル唯一ノ雑誌		(林瞬介)	582	⑨	: 2-3
ドイツ基本法の誕生 議会評議会議事資料		(山岡規雄)	583	⑩	: 2-3
新耽奇会記録 好古趣味の記録		(大沼宜規)	584	⑪	: 2-3
和蘭軍装図		(白岩一彦)	585	⑫	: 2-3



一般記事

国立国会図書館の蔵書、サービス、業務、図書館界の最新情報などを紹介。

インターネット資料の収集に向けて 国等の提供するインターネット資料を収集するための 国立国会図書館法の改正について		(総務部総務課、総務部企画課電子情報企画室)	581	⑧	: 4-11
英国図書館におけるビジネス支援サービスの取組み 英国図書館ビジネス知的財産センター ナイジェル・スベンサー氏の招へいから(主題情報部科学技術・経済課)			578	⑤	: 11-15
開館60周年記念貴重書展記念講演会 日本文化と日本語		(阿刀田高)	575	②	: 24-27
開館60周年記念貴重書展記念講演会 本の姿		(藤本孝一)	576	③	: 10-13
「開館60周年記念シンポジウム 知識はわれらを豊かにする」を終えて		(合庭惇)	575	②	: 21-22
学術文献録音サービスの展開 障害者向け資料の製作とサービスの拡大		(関西館図書館協力課)	577	④	: 12-14
カナダにおけるインターネットアーカイブの取組み		(イアン・ウィルソン)	574	①	: 9-10
危機をチャンスに 変化の時代の国立図書館の挑戦 第36回国立図書館長会議(CDNL)		(長尾真、佐藤従子)	584	⑪	: 4-5
公共図書館が国立国会図書館に期待すること		(総務部支部図書館・協力課)	582	⑨	: 18-21
国際政策セミナー「オーストラリア・ラッド政権の1年」-アラン・ギンジェル氏の基調講演から		(調査及び立法考査局調査企画課)	574	①	: 37-41
国内博士論文のご紹介		(関西館収集整理課)	574	①	: 34-35

国立国会図書館開館 60 周年記念シンポジウム 知識はわれらを豊かにする－国立国会図書館が果たす新しい役割－ (総務部総務課)	575 ② : 11-20
国立国会図書館がつくる 17 冊	576 ③ : 28-33
国立国会図書館デジタルアーカイブポータル PORTA のご紹介 (関西館電子図書館課)	574 ① : 26-32
国立国会図書館の平成 21 年度予算 (総務部会計課)	577 ④ : 20-21
国立国会図書館を見学してみよう 国会分館編 (調査及び立法考査局国会分館)	583 ⑩ : 18-21
国立国会図書館を見学してみよう 東京本館編 (総務部総務課)	581 ⑧ : 12-15
国連ドキュメント 東京本館議会官庁資料室の資料から (調査及び立法考査局議会官庁資料課)	584 ⑪ : 20-23
サービス・業務の改善を目指して 国立国会図書館の活動実績評価 (総務部企画課)	581 ⑧ : 28-33
社史は情報玉手箱 (主題情報部科学技術・経済課)	583 ⑩ : 30-31
出発進行! 「のりもの」本めぐりへ (国際子ども図書館「出発進行! 『のりもの』本めぐりへ」展示班)	582 ⑨ : 12-17
書誌データの作成および提供:次のステップへー平成 20 年度書誌調整連絡会議から(収集書誌部収集・書誌調整課)	576 ③ : 18-21
新指定貴重書のご紹介 第 44 回貴重書等指定委員会報告 (貴重書等指定委員会)	578 ⑤ : 26-31
新年のごあいさつ 将来の方向性を定める年 (長尾真)	574 ① : 48
数字で見る国立国会図書館 『国立国会図書館年報 平成 20 年度』から (総務部総務課)	584 ⑪ : 24-25
第 16 回 アジア・オセアニア地域国立図書館長会議 (総務部支部図書館・協力課)	574 ① : 11-17
デジタル時代のスウェーデン国立図書館の挑戦 (ゲンナー・サーリン)	577 ④ : 4-5
電子書籍の流通・利用・保存 図書館および図書館情報学に関する調査研究の報告会から (関西館図書館協力課)	579 ⑥ : 20-24
電子展示会「ブラジル移民の 100 年」－資料の収集から電子展示会の提供まで (主題情報部参考企画課、政治資料課)	576 ③ : 15-17
ドイツ政府機関図書館の連携協力 (マリア・ゲッカーリッツ)	582 ⑨ : 28-29
東洋文庫 その歴史と蔵書 (渡邊幸秀)	578 ⑤ : 16-17
図書館の礎を築く 資料収集方針書(2009)について (収集書誌部収集・書誌調整課)	584 ⑪ : 6-9
図書館が未来を創る 文化遺産を礎に 世界図書館情報会議－第 75 回国際図書館連盟 (IFLA) 大会 (国立国会図書館 IFLA ミラノ大会派遣団)	575 ⑫ : 14-22
国際的な協力関係の構築 政府機関図書館分科会と国際協力担当者会合 (ローラーミカ)	585 ⑫ : 16
民主主義のためのデジタル情報 議会のための図書館・調査サービス分科会 (矢部明宏)	585 ⑫ : 17-18
次々と刊行される書誌情報の基準・ガイドライン 書誌分科会、目録分科会 (原井直子)	585 ⑫ : 19
多角的にとらえる保存資料 資料保存コア活動、IFLA 資料保存分科会関連会議 (岡橋明子)	585 ⑫ : 20-21
「読書人の国を造る」 児童・ヤングアダルト図書館分科会 (小林直子)	585 ⑫ : 22
ナレッジ社会における図書館 図書館の将来像を語る (クラウディア・ルクス)	579 ⑥ : 10-11
日本の近代政治史料を探る 憲政資料の収集 「松下芳男関係文書」を例に (主題情報部政治史料課)	580 ⑦ : 13-17
ネットからアジアが見える 関西館アジア情報室の情報発信サービス (関西館アジア情報課)	584 ⑪ : 10-12
納本制度が抱える課題－納本制度 60 周年記念アンケート調査の結果から (収集書誌部)	575 ② : 32-35
ペルシア語写本に導かれて ラシード・ウッドディーン国際会議参加記 (白岩一彦)	577 ④ : 23-25
リサーチ・ナビ ここに、調べもののヒントがあります。 (主題情報部参考企画課)	579 ⑥ : 12-15
利用者アンケートを活用したサービス改善 (総務部企画課)	575 ② : 36-37
ワールドデジタルライブラリー 文化遺産を一望する (田中久徳)	580 ⑦ : 4-9



国立国会図書館の書庫

一般に公開していない書庫の構造、設備を案内し、蔵書の保存や利用のための様々な工夫を紹介。

第 1 回 東京本館 (総務部管理課)	579 ⑥ : 17-19
第 2 回 関西館・国際子ども図書館 (総務部管理課)	580 ⑦ : 20-21
第 3 回 書庫の環境を整える (1) (総務部管理課、収集書誌部資料保存課)	581 ⑧ : 26-27
第 4 回 書庫の環境を整える (2) (収集書誌部資料保存課)	582 ⑨ : 22-23
第 5 回 収納効率を考えた書架 (総務部総務課)	583 ⑩ : 28-29
第 6 回 書庫の中の書庫 貴重書庫 (主題情報部古典籍課)	584 ⑪ : 14-15
第 7 回 (最終回) 資料にあわせた書架の利用 (総務部総務課)	585 ⑫ : 24-25

図解 国立国会図書館のしごと

国立国会図書館のサービスや業務について、図やチャートで紹介。

納本のしくみ		577 ④	: 16-19
カウンターの裏側		580 ⑦	: 10-11
支部図書館制度		581 ⑧	: 16-17
立法調査サービス		583 ⑩	: 14-17
資料整理休館日		584 ⑪	: 16-17

図書館で学ぶ

調べものに役立つ情報や資料の活用法など、国立国会図書館ならではの知識を紹介。

第1回 韓国関連情報の調べ方	(関西館アジア情報課)	578 ⑤	: 20-25
第2回 科学技術資料の探し方	(関西館文献提供課)	579 ⑥	: 26-31
第3回 医療情報、技術情報の調べ方	(主題情報部科学技術・経済課)	580 ⑦	: 22-26
第4回 明治・大正時代の新聞の調べ方	(主題情報部新聞課)	581 ⑧	: 22-25
第5回 法令・議会・官庁資料の調べ方	(調査及び立法考査局議会官庁資料課)	583 ⑩	: 23-27

本の万華鏡ができるまで

ミニ電子展示会「本の万華鏡」の作成に携わる職員が展示のエピソードや本の探し方のコツなどを紹介。

第1回 アメリカ大統領の歴史—あらためて知る 220年—	(展示委員会「本の万華鏡」担当)	579 ⑥	: 25
第2回 洋靴—足元からの文明開化—	(展示委員会「本の万華鏡」担当)	584 ⑪	: 13

使う人がいる 守る人がいる

蔵書の利用と保存を両立させるため、劣化や破損を防ぐ様々な工夫を紹介。

最終回 連載を終えるにあたって	(総務部総務課、資料提供部利用者サービス企画課)	574 ①	: 33
-----------------	--------------------------	-------	------

開館60周年を記念して「1998-2008」この10年のトピックスと今後

国立国会図書館が開館60周年を迎えた2008年、この10年の発展の経緯と今後の展望をトピックごとに紹介。

第8回 (最終回) 図書館協力事業の展開	(関西館図書館協力課)	574 ①	: 18-24
----------------------	-------------	-------	---------

本屋にない本

本誌創刊以来続くコーナー。納本制度により収集した出版物の中から、主に取次店を通らず入手しにくい国内出版物を紹介。

『35周年記念警備業の歩み』	(岩浅美輪)	575 ②	: 28-29
『100年のあゆみ 通史/部門史』(阪急阪神ホールディングス刊)	(松田稔広)	578 ⑤	: 19
『赤坂檜町の三万年 東京ミッドタウン前史 旧石器～長州藩下屋敷～歩兵第一連隊』	(澤田大祐)	576 ③	: 23
『アツギ60年史』	(金井ゆき)	575 ②	: 31
『板橋と光学 国産フィルム発祥の地 光学王国 企画展』	(佐藤令)	585 ⑫	: 27
『海辺の小屋 新潟の舟小屋・浜小屋・番屋』	(井田敦彦)	580 ⑦	: 18

『海を巡った葉種 江戸時代のくすりと海運 平成 19 年度夏季企画展』	(津田深雪)	577 ④ : 26-27
『江戸の花屋敷 百花園学入門 向島百花園創設 200 周年記念』	(村尾優子)	582 ⑨ : 25
『演劇人坪内逍遙 早稲田大学創立 125 周年記念 企画展示』	(石澤文)	577 ④ : 27-28
『お茶の水図書館の 60 年』	(光島有里)	576 ③ : 22
『宮廷のみやび 近衛家一〇〇〇年の名宝 陽明文庫創立 70 周年記念特別展』	(濱田久美子)	574 ① : 25
『香蘭社 130 年史』	(村井智子)	584 ⑪ : 18
『公立図書館・文書館・博物館 協同と協力の動向』	(柳与志夫)	585 ⑫ : 26
『砂糖のまち、堺筋 江戸時代の砂糖流通 平成 20 年度夏季企画展』	(藤本守)	584 ⑪ : 19
『誌上のユートピア 近代日本の絵画と美術雑誌 1889-1915 カタログ』	(上田知佳)	581 ⑧ : 20-21
『蜀山人大江南畝 大江戸マルチ文化人交遊録』	(林雅樹)	582 ⑨ : 26
『旅 江戸の旅から鉄道旅行へ 企画展示』	(山岡規雄)	580 ⑦ : 19
『多摩動物公園 50 年史/資料編』	(矢部明宏)	582 ⑨ : 24
『帝室技芸員と一九〇〇年パリ万国博覧会』	(松永しのぶ)	579 ⑥ : 33
『天馬 シルクロードを翔ける夢の馬 特別展』	(福林靖博)	579 ⑥ : 32
『フランス横浜郵便局』	(佐々木美穂)	583 ⑩ : 13
『文明開化期のちりめん本と浮世絵 学校法人京都外国語大学創立 60 周年記念稀観書展示会-展示目録』	(大塚奈奈絵)	575 ② : 29-30
『街かど美術館アート@つちざわ〈土澤〉 advance カタログ 3rd(2007)』	(中野路子)	578 ⑤ : 18
『野州麻 道具がかたる麻づくり 「野州麻の生産用具」国指定重要有形民俗文化財指定記念 平成二十年春季企画展』	(大西啓子)	581 ⑧ : 19-20



館内スコープ

館内の様々な業務を担当職員が紹介するコラム。

50 万人の博士たち	(関西館収集整理課)	574 ① : 36
ポスター元年	(総務部総務課)	575 ② : 23
大学図書館の日々	(Centre d'études de l'Asie de l'Est, Université de Montréal 派遣職員)	576 ③ : 14
障害者サービスの広がりを目指して 障害者サービス担当職員向け講座	(図書館協力課障害者図書館協力係)	577 ④ : 15
貴重書指定 伝わる知、伝える使命	(主題情報部古典籍課)	578 ⑤ : 32
リサーチ・ナビの〈素〉	(参考企画課)	579 ⑥ : 16
「若しくは」→「ジャクシクハ」?	(総務課法規係)	580 ⑦ : 12
三権分立を超えて…	(総務部支部図書館・協力課)	581 ⑧ : 18
国立国会図書館年報 1 年がつまった 1 冊	(総務課編集係)	582 ⑨ : 11
鳴り止まない電話 緊張の調査受付	(国会レファレンス課)	583 ⑩ : 22
図書館にあるのは紙の本だけではありません	(電子資料課)	584 ⑪ : 26
人と人とのつながりから生まれるもの	(資料保存課)	585 ⑫ : 23



ビジュアル 国立国会図書館博物館

館内で長い間使っているモノ、かつて大活躍したモノを紹介。

No.13 ものさし	(小林昌樹)	577 ④ : 22
No.14 漢字テレタイプ型入力機	(倉光典子)	582 ⑨ : 27



N D L News 当館の最近の動き

館の新しい動き、重要な会議等の報告。

アジア学会 (AAS)・東亜図書館協会 (CEAL) 2009 年年次総会および北米日本研究資料調整協議会 (NCC) 会議	578 ⑤ : 33
おもな人事	575 ② : 39 577 ④ : 30-31 584 ⑪ : 28
韓国国会図書館との第 6 回業務交流	575 ② : 39
韓国国会立法調査処開設 1 周年記念 国際セミナーの開催	574 ① : 42
国民読書年プレ・イベント	585 ⑫ : 28
国立国会図書館関西館見学デー	574 ① : 42
国立国会図書館支部東洋文庫の廃止	577 ④ : 30
支部図書館制度 60 周年記念国立国会図書館長と行政・司法各部門支部図書館長との懇談会	575 ② : 38
第 5 回資料保存懇話会	574 ① : 43
第 10 回図書館総合展	574 ① : 43
第 16 回総合目録ネットワーク参加館フォーラム	578 ⑤ : 33
第 16 回納本制度審議会および第 7 回納本制度審議会代償金部会	581 ⑧ : 34
第 17 回アジア・オセアニア地域国立図書館長会議 (CDNLAO) および第 14 回東南アジア図書館人会議 (CONSAL)	579 ⑥ : 34
第 17 回納本制度審議会	584 ⑪ : 27
第 50 回科学技術関係資料整備審議会	577 ④ : 29
中国国家図書館創立 100 周年記念式典および国際シンポジウム	584 ⑪ : 28
「電子書籍の流通・利用・保存に関する調査研究」報告会	577 ④ : 29
納本制度審議会オンライン資料の収集に関する小委員会 (第 1 回)	585 ⑫ : 28
平成 20 年度国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会	575 ② : 38
平成 21 年度国際子ども図書館連絡会議	581 ⑧ : 35
平成 21 年度国立国会図書館長と都道府県立及び政令指定都市立図書館長との懇談会	581 ⑧ : 35
平成 21 年度児童サービス連絡会	585 ⑫ : 29
平成 21 年度補正予算による大規模デジタル化	579 ⑥ : 34
法規の制定	578 ⑤ : 34-35 581 ⑧ : 36
宮本沙海氏から墨画寄贈	580 ⑦ : 27
ワールドデジタルライブラリー (World Digital Library) 合意書締結	575 ② : 39



お知らせ

新しいサービス、イベント、研修等のお知らせのほか、刊行物の案内を掲載。

ISSN 登録した国内オンラインジャーナルのリストを掲載しました	580 ⑦ : 29
NDL-OPAC で検索できる資料が増えました	578 ⑤ : 43
NDL-OPAC で『雑誌記事索引 自然科学編』1950 年～1958 年のデータが検索できるようになりました	577 ④ : 32
NDL-OPAC の検索結果がダウンロードできるようになりました	576 ③ : 25
NDL-OPAC の検索結果から他のデータベースへリンクするサービスを開始しました	582 ⑨ : 32
PORTA で J-STAGE が検索できるようになりました	584 ⑪ : 29
PORTA のサービス拡大 - CiNii、JAIRO が検索できるようになりました - 携帯端末用サイトを試験公開しました	582 ⑨ : 30
PORTA をリニューアルしました	580 ⑦ : 28
アジア言語 OPAC でタイ語図書が検索できるようになりました	581 ⑧ : 42
インターネット版 NDL-OPAC で「日本占領関係資料」「ブランゲ文庫」が検索できるようになりました	577 ④ : 32
印画紙への引伸印画サービスの終了	585 ⑫ : 33
絵本ギャラリーで『コドモノクニ』が検索できるようになりました	578 ⑤ : 38

学術文献録音サービスを拡大します	577	④	: 35
関西館小展示第1回「ダーウィン生誕200年、『種の起源』刊行150年」	578	⑤	: 39
関西館小展示第2回「日食を追うひとびとー7月22日皆既日食にちなんで」	580	⑦	: 32
関西館小展示第3回「眺めてみよう、色々な国・時代の百科事典」	582	⑨	: 35
関西館小展示第4回「冬季オリンピック」	585	⑫	: 32
近代デジタルライブラリーで15万冊以上の図書が閲覧可能になりました	582	⑨	: 31
講演会「インターネットと文化：チャンスか危機か」	581	⑧	: 37
講演会「パピルスからPDFへ：よみがえるアレクサンドリア図書館」	581	⑧	: 38
国際子ども図書館講演会「インド児童文学の現在」（仮題）	584	⑪	: 32
国際子ども図書館講演会「本と子どもと大人をつなぐ場所ー“本の城”（IJB）での20年」	582	⑨	: 34
国際子ども図書館展示会「出発進行！『のりもの』本めぐりへ」	579	⑥	: 36
国際子ども図書館展示会「出発進行！『のりもの』本めぐりへ」関連講演会	581	⑧	: 40
国際子ども図書館展示会「世界をつなぐ子どもの本ー2008年度国際アンデルセン賞・IBBYオナーリスト受賞図書展」	580	⑦	: 30
国際子ども図書館展示会「ゆめいろのパレットⅣー野間国際絵本原画コンクール入賞作品 アジア・アフリカ・ラテンアメリカから」	574	①	: 45
国際子ども図書館展示会「ゆめいろのパレットⅣー野間国際絵本原画コンクール入賞作品 アジア・アフリカ・ラテンアメリカから」関連講演会	576	③	: 26
国際子ども図書館夏休み催物「科学あそび」じしゃくのふしぎ	579	⑥	: 39
国際政策セミナー「持続可能な社会の構築」	583	⑩	: 34
国立国会図書館件名標目表2008年度版を公開	579	⑥	: 37
国立国会図書館データベースフォーラム	581	⑧	: 39
国立国会図書館データベースフォーラム（関西館）	580	⑦	: 33
「子ども霞が関見学デー」に参加します	580	⑦	: 31
「子どものためのこどもの日おたのしみ会」開催します	577	④	: 35
「子どものための春休みおたのしみ会」開催	575	②	: 40
雑誌記事索引のRSS配信サービス開始	574	①	: 44
書誌コントロールの将来に関する米国議会図書館ワーキンググループ報告書（On the Record）の日本語訳を公開	581	⑧	: 41
調べものに役立つWebサービス「リサーチ・ナビ」の提供開始	578	⑤	: 36
資料収集の方針をホームページに掲載しました	582	⑨	: 33
資料の大規模デジタル化に伴う原資料の利用停止について	585	⑫	: 31
政府職員名簿の利用停止の解除および名簿類の利用の許可制導入について	581	⑧	: 46
第11回図書館総合展に参加します	583	⑩	: 33
第13回資料保存研修	578	⑤	: 42
第16回東京国際ブックフェアに参加します	579	⑥	: 40
第20回保存フォーラム	581	⑧	: 43
帝国議会会議録が明治44年から検索できるようになりました	579	⑥	: 35
電子展示会「江戸時代の日蘭交流」が始まりました	585	⑫	: 30
電子展示会「ブラジル移民の100年」の提供開始	576	③	: 27
東京本館「30分でわかる調べ方ガイダンス」	583	⑩	: 32
東京本館から関西館へ資料を移転します	577	④	: 34
図書館向け「電子メールレファレンスサービス」休止	575	②	: 40
年末年始のご利用について	584	⑪	: 30
平成21年度アジア情報研修「現代インド情報の調べ方」	581	⑧	: 45
平成21年度科学技術情報研修	581	⑧	: 44
平成21年度国立国会図書館職員採用試験	576	③	: 24
平成21年度「児童文学連続講座ー国際子ども図書館所蔵資料を使って」	580	⑦	: 34
平成21年度障害者サービス担当職員向け講座	583	⑩	: 35
平成21年度図書館員のための利用ガイダンス	579	⑥	: 38

平成 21 年度図書館情報学実習生を募集します	577 ④ : 33
平成 21 年度の図書館員を対象とする研修計画	578 ⑤ : 40-41
平成 21 年度レファレンス研修	584 ⑪ : 31
「本の万華鏡」第 1 回「アメリカ大統領の歴史—あらためて知る 220 年」	578 ⑤ : 37
「本の万華鏡」第 2 回「洋靴」	582 ⑨ : 36
ミニ電子展示「本の万華鏡」の提供開始	578 ⑤ : 37
明治時代の本の著作権者を探しています	580 ⑦ : 33
「琉球列島米国民政府 (USCAR)」公安局文書の提供を開始しました	577 ④ : 32
●新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物	
NDL CD-ROM Line 点字図書・録音図書全国総合目録 2008 年 2 号～2009 年 1 号	574 ① : 47 580 ⑦ : 35
外国の立法 立法情報・翻訳・解説 第 238 号～第 241 号	574 ① : 47 577 ④ : 36 580 ⑦ : 35 583 ⑩ : 36
カレントアウェアネス 298 号～301 号	574 ① : 46 580 ⑦ : 36 583 ⑩ : 36
参考書誌研究 第 69～70 号	574 ① : 46 578 ⑤ : 43
米国の図書館事情 2007 - 2006 年度国立国会図書館調査研究報告書 - (図書館研究シリーズ No.40)	574 ① : 47
平成 20 年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録「日本の昔話」	584 ⑪ : 32
レファレンス 第 695 号～第 706 号	毎号
●入手案内 国立国会図書館の編集・刊行物	576 ③ : 34-38



『国立国会図書館月報』のご購入については
社団法人 日本図書館協会へお問い合わせください。
バックナンバーも取り扱っております。
〒104-0033 東京都中央区新川 1-11-14
電話 03 (3523) 0812 (販売)





てつどう(鉄道)

線路の上を力強く走り、たくさんの人やものを
運せて遠くまで行ける鉄道は、子どもたちにとって、
とても身近な乗り物の一つです。

このコーナーでは、まず、鉄道が世の中に登場した
ころのことを書いた本を紹介します。

次に、たくさんの種類がある鉄道のなかから、
蒸気機関車、路面電車、地下鉄、新幹線が出
てくる児童書を展示しています。「駅」や「鉄道
の駅」といったテーマも設けました。

国際子ども図書館では、平成
22年2月7日(日)まで、子ども
たちが大好きな「のりもの」
の本の展示会を開催してい
ます。

明治期の乗り物絵本や『きか
んしゃトーマス』、『しょう
ぼうじどうしゃじぶた』など、
所蔵資料を中心に、国内外の
作品約250点を展示してい
ます。

子どもから大人まで、みなさ
んに楽しんでいただけるよ
うな展示会になっています。

残すところ1か月余り。どう
ぞお乗り遅れのないようお
楽しみください。

出発 進行! 「のりもの」本めぐりへ

All Aboard! for a Trip around Books on Vehicles

平成 21 年 7 月 18 日(土)~平成 22 年 2 月 7 日(日)

CONTENTS

- 02 Book of the month - from NDL collections
Oranda gunso zu
- 04 Talks with the Librarian of NDL (12)
Ms. Kyoko Matsuoka, Scholar of children's literature
Reading is communication with books
- 14 Libraries create futures: building on cultural heritage
World Library and Information Congress: 75th IFLA General Conference and Assembly
- 16 Development of international cooperative relations : Government Libraries Section and liaison meeting on international cooperation
- 17 Digital information for democracy : Library and Research Services for Parliaments Section
- 19 Standards and guidelines for bibliographic information published one after another : Bibliographic Section and Cataloguing Section
- 20 Preservation from various angles : IFLA Core Activity on Preservation and Conservation (PAC), Preservation and Conservation Section and related sessions
- 22 Raising a nation of readers : Libraries for Children and Young Adults Section
- 24 Stacks of the NDL (7)
Use of bookshelves adjusted to materials (last of series)
- 23 <Tidbits of information on NDL>
What arises from the person-to-person relationship
- 26 <Books not commercially available>
○ *Koritsu toshokan, bunshokan, hakubutsukan : kyodo to kyoryoku no doko*
○ *Itabashi to kogaku : kokusan firumu hassho no chi kogaku okoku: kikakuten*
- 28 <NDL NEWS>
○ Events preceding National Year of Reading
○ Subcommittee on Acquisition of Online Publications of the Legal Deposit System Council
○ Liaison meeting on services for children FY2009
- 30 <Announcements>
○ Digital exhibition "Japan-Netherlands Exchange in the Edo Period" now available on the NDL website
○ Discontinuance of reader service of original materials because of mass digitization
○ Small exhibition in the Kansai-kan (4) The Winter Olympics
○ End of enlarged print service to photographic paper
○ Book notice - publications from NDL
- 34 Annual index to *National Diet Library Monthly Bulletin*, nos. 574-585

国立国会図書館月報

平成 21 年 12 月号 (No.585)

平成 21 年 12 月 20 日発行 定価 525 円
(本体 500 円)

発行所 国立国会図書館
編集者 網野光明
責任者
〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp

発売 社団法人日本図書館協会
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03 (3523) 0812 (販売)
FAX 03 (3523) 0842
E-mail hanbai@jla.or.jp

印刷所 株式会社エポ

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜すいして転載される場合には、事前に当館総務部総務課に連絡してください。本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) - 「刊行物」 - 「国立国会図書館月報」でご覧いただけます。



「江戸近郊八景之内 飛鳥山暮雪」部分
歌川広重（1世）画 [天保9(1838)頃]
1枚 25×37cm
〔「江戸近郊八景」<請求記号 WA33-5>所収〕

国立国会図書館月報

平成21年12月20日発行 (毎月1回20日発行)
(12月号通巻585号)

発売：社団法人日本図書館協会 定価525円(本体500円)